

「譚綴」

『すすきが原』



九谷 六口

都筑は戸惑っていた。

趣味として小説を書いていたが、ひょんなことから自分の小説「薄が原」の映画化が決まったのだ。

——世の中、何が起こるか判らないな。この物語を書く切っ掛けも妙だった。そう言えば、相澤さん、今、どうしているのだろうか。

都筑は、相澤の姿を思い出していた。関が原の合戦で都筑の先祖と刀を交えたと相澤から聞いた時には驚いてしまった。この老人はボケてる。いやボケどころではない、狂っていると思った。だが、今は違っていた。

久美は今も傍にいてくれる。顔を向ければ微笑んでくれる。

都筑は、ふと心配になった。

——果たして久美を演ずることができる女優など、いるのだろうか。

都筑は、ごく普通のサラリーマンだった。生真面目な性格のためか、実に規則正しい生活を送っていた。朝は、四時か五時には必ず起きた。友人は年寄り染みていると笑うが、本人は気にしていない。

都筑は、既に四十歳を少し過ぎていたが、一人で都内の三階建てマンションの最上階に住んでいる。以前は賃貸マンションであったが、どうせ家賃を払うのであれば、多少月々の出費は多くなっても分譲の方がと考えた。マンションを選ぶ条件は決めていた。何階建てであっても構わないが、買うのは最上階。理由は単純である。例え鉄筋コンクリート造りとはいえ、自分の上で寝起きする人間がいるなどと考えだけでも気味悪く感じるからだ。運良く手頃な金額であり、しかも条件に合ったマンションを買うことが出来た。

都筑の部屋は、十二畳のリビングと四畳半のキッチン。それに六畳の和室だった。都筑にとっては快適な住まいである。間取りだけではなく、都筑がこの部屋を気に入った理由があった。この付近は、環境規制により高さが制限されている。マンションの周囲には高層ビルなどは建っていない。お陰でベランダからは、日の出や日の入りを見ることができたし、夜になればくつきりと月を見ることが出来た。

部屋からの眺めはとても良い。仕事に疲れた時などは、ベランダに出て煙草を燻らせながら月を見る。すると夜風も手伝い、心が安らいでくる。ベランダには草木の鉢植えが所狭しと置いてあった。都筑は、何も言わずに健気に美しく咲く花が大好きだった。毎朝の水遣りは欠かさない。一つ一つの鉢に、また咲いておくれと声を掛けながら水をあげた。

都筑は独身だが、女性が嫌いだとか変な趣味があるとか、そのような男ではない。綺麗な女性を見れば充分に心は動くし、グラマーな体を見れば動くところはきちんと動く。若い頃には幾つかの激しい恋も経験している。好みをとやかく言うこともないのだが、今まで生活を共にしたいと思う女性は一人もいなかった。縁がないと言ってしまうばそれまでのだが、別に結婚などしなくても不便はないと思っっている。

——無理をしても、所詮、無理は無理。無理はいけない。ま、どうせなるようにしかならないしな。流れに身を任せて生きるのも人生。とにかく、このままで良いと思っっていた。

仕事は真面目にやった。今の会社には中途採用で入った。有能とは言えないまでも、会社からは、そこそこの評価を受けていた。

都筑が入社して三年目だったが、会社は経費削減を目的に事務所を移転した。昨今の不景気の煽りを受けたのだ。業績が下がり出したのは、五、六年前からであった。会社は、これではいけないとマーケティング力の強化を考え、販売企画スタッフと営業社員を募集した。都筑は、この時に入社した。入社当時は、立派な九階建てビルの人階フロアーを借りていた。事務所は広く、ゆったりとした職場環境は仕事の効率を上げてくれた。

このビルの窓からは東京湾を見ることができた。都筑は、仕事に疲れると良く窓際に行って海を眺めた。昼休み時間には、ビルの外に出て、海を見ながら心地良い風を受けたりもした。

会社は都心にあるビルに引っ越したが、このビルは、築三十年と古く、しかも窓が少なかった。もつとも窓を開けたとしても見えるのは隣のビル

の壁であり、鬱陶しいだけであつた。二階フロアーを借りたのだが、昼時になれば地下にある飲食街から、天麩羅を揚げる匂いやニンニクを炒める匂いが流れてきたりした。

環境としては良くないが、これも仕方のないことであつた。何しろ業績は右下がりで、潰れることはないだろうが先行きは暗かつた。

都筑の通勤時間は、以前とほぼ同じだったが、地下鉄大江戸線を使わなければならかつた。都筑は、閉鎖された空間は余り好きではない。しかも、この地下鉄は騒音が酷かつた。朝夕の混み具合は想像を絶するもので、乗客のいきれなど耐え難い思いに駆られる毎日であつた。仕事で遅くなつた日など、そこ此処でだらしなく居眠りをする乗客を見てしまうが、他人事とは言え、悲しさまで感じてしまう。

都筑はマーケティング部に所属し、商品の販売計画や広報、宣伝計画などを担当した。たまには外出することもあるが、デスクワークの方が多い。

会社は九時に始まる。都筑は、必ず二、三十分前には出社するようにしていた。時間に追われるのは好きではない。何事に対しても同じなのだが、出来得る限り余程を持つようにしていた。

「都筑さん、地下鉄通勤、慣れました」
人事部の小島夕子が声を掛けてきた。

夕子は、採用試験や入社手続きなどを担当している。都筑が入社した時に、夕子は手続きなどについて丁寧に説明してくれた。都筑は几帳面だったが、小さい字で細々と書かれている書類を読むと頭が痛くなってしまう。年末調整の書類などを見るもの嫌であつた。だが夕子のお陰であるうか、間違えることなく入社書類を書くことができた。

入社後も夕子は、何やかやと都筑に声を掛けるようになっていた。都筑は親切な人だと思つたが、人事部のスタッフは、皆、こうなのかとも考えていた。

「駄目だね。あの地下鉄は、車両が小振りに出来ているんだ。車内は何だか狭苦しい感じなんだよ。空いてれば座れるけど、前に座っている人がすぐ目の前って感じなんだ。落ち着かないよ。それに立っている人も二列がやつとなんだ。三列になると、もうラッシュ並み」

「騒音はどう」

「トンネル自体も小さいんじゃないかな。それに曲がりくねっている。五月蠅いったらないよ。曲がる時なんかレールと車輪が磨れるんだね、キーキー言って神経が変になるんじゃないかと心配だよ。朝なんか、この音を聞くと減入っちゃう。これから仕事が始まるって言うのにさ」

「本でも読めば気が紛れるんじゃない」

「僕は車内で本や新聞を読まないことにしている。だって、どんなに体を小さくしても、周りの人に迷惑が掛かるからね。よく居るよ、人に背中を押し付けて平気で新聞読んでる人が。そういう人の気が知れないね」

「でも他に交通機関はないんでしょ」

「そうなんだ。ま、入社してまだ三年目の社員が、こんなことで事務所を替えてくれなんて言えないしね。それに、引越したばかりだ。僕だってやつと転職できたんだから我慢する以外にないよ」

たまにだが、混んではいても座席に座れることがある。

ある日、何の気なしに乗客を眺めてみた。化粧をする女。鼻毛を抜く中年男。居眠りするサラリーマン。いろいろな乗客がいる。ほとんどの乗客は、周りを意識することなどない。余りにも無防備に口を開けて居眠りをしている中年サラリーマンや若い女性を見ると、何か寂しさのようなものを感じることもあった。

—— もう少し、周りの人の目を気にしても良いんじゃないの。あのようには、なりたくないな。

都筑は顔をしかめるが、そんな思いとは裏腹に、観察するには打ってつけであり、どうしようもない乗客たちに出会っていると嬉しくなってしまう。都筑は、乗客たちを観察することで以前よりは多少なりとも気が紛れるようになっていた。

—— 良い意味でも悪い意味でも人は十人十色。

しかし、観察するのが面白くなると、それだけでは物足りなくなってきた。都筑は良い方法を見つけた。妄想である。妄想に耽ることにより混んだ車内にいるという現実を忘れることができたのだ。乗客でも良いし空想の人物でも良い。とにかく、誰かを登場させて頭の中でその人物と語り合うのだ。思わぬ方向に話が展開することもある。不思議なことに、都筑の思いを無視して、彼らが好き勝手に行動を取ったり、活き活きと話し出すこともあった。

雨の日など、濡れた傘がズボンに押し付けられることがある。だが妄想の世界に入ってしまった気にならなかった。こうなると通勤時間が楽しくなってくる。

「都筑さん、地下鉄慣れたんでしよう」

夕子は、都筑が出社すると毎日のように声を掛けてくる。社員たちは、夕子の変化に気付いていた。都筑と話をする時の夕子は、今までと違っていたのだ。一部の社員の間では、夕子は都筑に興味を持ちだしたのではないかと囁かれていた。

当然だが、都筑は夕子の変化したことを知らない。噂は耳にしたことがあったが、別に迷惑とは感じていなかった。

「何故、そう思うの」

「だって、出社しても余りイライラしてないわ。少し前までは額に皺を寄せてた。今だから言えるけど、あのような顔付きって良くないと思うの。周りの人にも移るし、部屋の雰囲気がキリキリしちゃうと思うの」

「へー、そういうものかな。悪かったね」
「ふふ、謝ることなんてないわ」

「しかし、さすが人事部だね。良く気がつくよ。社内の雰囲気になで気を配るなんて、しっかりしてる」

都筑は特別な意味を込めて話している訳ではない。

「でも、あんなに顔をしかめていたのに、どうしたの」

「実はね、地下鉄イライラ解消法を見つけたんだ」

都筑は、乗客観察や妄想に耽ることを話した。最近、夕子は遠慮のない話し方をするようになっていた。

「やだー、そんなの悪趣味よ」

「悪趣味？」

「そうよ。そんなことしたら相手に失礼よ。それに知らない人に観察されているなんて……。私だったら考えただけでも嫌だわ」

「そうかな。観察されるのが嫌だったらキチンといていけば良いのに」

「そんなの変よ。車内で騒いだりしない限り何やっててもその人の勝手よ。それにジロジロ見たりして……怖い人と目が合ったりしたら危ないわよ。少しは気を付けないと」

「大丈夫。ジロジロ見たりなんてしてないよ。それに今まで目が合ったりしたことはないからね。皆、自分の世界に閉じこもっている感じだよ。周りなんか気にしていない。化粧する女の人なんて、まさにそうだと思うな。そういう女性って僕には信じられない。自分のことをどう考えているのか不思議な気持ちになるよ」

「自分のこと？」

「うん。化粧する姿なんて人に見せるものじゃない。亭主にだって見せちゃいけない。男も女も節度が必要だよ。女性にとって一番大切なのは、淑やかさだよ」

「あら、随分、古い言葉ね」

「そうかな」

「そうよ。何でもスピードアップしてるのにお淑やかになんかしてたら総てに乗り遅れちゃうわ」

まだ仕事を始める時間にはなっていない。また遣ってるな。出社した社員たちは、面白そうに二人の会話を聞いている。

「確かに淑やかな身のこなしと言えば、のんびり、ゆっくりのイメージがあるけど、本来は違う。素早い身のこなしや激しい動きの中にも淑やかさはある。要するに内面の問題なんだよ。つまり品だね。見せて良いこととイケない事があるのに、今は滅茶苦茶だよ。特に若者は酷いんじゃないかな」

「まー、自分だって、まだ若いくせに」

「小島さん、四十過ぎの男をつかまえて若いなんて言っちゃ駄目だよ」

「あら何故」

「言われた方は馬鹿にされてるんじゃないかと思うよ」

「そ、そんな積りじゃ……」

夕子は明らかに戸惑いを見せた。周りの社員はニヤニヤしている。

「とにかく日本人の良さが薄れている。品位、謙虚さ……。せめて女性には、そう在って欲しいな」

「都筑さんて、お品が良くてお鼻が高く、お淑やかにしゃなりしゃなりした女性が理想なの。そんな人、今、どこ捜したっていないわよ」

「どうも小島さんと話していると可笑しな方向に話がいつちやうな、品が良いというのはね、鼻をツンと高くすることじゃないよ」

「都筑さんて理屈っぽいわ。何だかお爺さんと話してるみたい」

「さつき若者って言ったくせに、今度は、お爺さんだ。小島さん、考えてもご覧よ。ああいう女性はね、目覚ましが鳴つてもすぐには起きない。かなり経ってから飛び起きるんだよ。寝ぼけ眼で時計を見る。すると時間が無い。トイレに駆け込んで、そして急いで着替える。そのままドアをバタンと閉めてご出勤。化粧は電車の中。不規則でだらしない毎日だと思うな」

「まー、都筑さんてそんな風に考えるの。あー怖ッ！ 都筑さんの妄想って凄いわね。私のことも、そうやって観察してるんじゃないでしょうね。止めてよ、変な妄想の材料にするの」

夕子は体をくねらせて子供がやるようなイヤイヤをした。その度に大きな胸が揺れた。

「そんな事してないよ。小島さんとは噛み合わないところもあるけど、節

度ある女性だと思っている。……ま、まさか、君、車内で化粧なんてしないよね」

「私は、お淑やかでもお品が良いとも思っていないけど、車内でお化粧なんかしません。しかめっ面で出社されるのも嫌だけど、観察なんて絶対に止めた方が良いと思うわ」

「さー、お二人さん。なかなか面白い話だが、そろそろ時間だよ。都筑君、仕事を始めてくれないか」

聞いていた社員たちは、物足りないような顔をしながらデスクに顔を向けた。

夕子は、都筑が小島さんとは噛み合わないところもあると言ったことが気になっていた。そして冷静さを保ちながら話すことに、多少疲れを感じていた。

こんな会話があつたが、都筑は、相変わらず地下鉄の中では妄想に耽っていた。妄想を続けるうちに、ある事に気が付いた。これらを書き留めれば物語になるのではないか。いや、ひよっとすると小説に仕立てることができるかも知れない。

これが、小説を書きだした切っ掛けであつた。

この日も地下鉄は混んでいたが、運良く座ることができた。乗客を観察したいが、立っている乗客を眺めるためには顔を上げなくてはならない。これでは目立ってしまう。仕方なく静かに妄想に耽ることにした。

今、思い描いている小説は、地下鉄を舞台にしたSF物だった。大筋は出来上がり、詳細を考える段階に入っている。

“いつも使っている地下鉄。降りる駅が近付いてきた。新井は腰を上げ、ドアの方に移った。車内放送が聞こえてきた。だが駅名が違う。」「おかしいな」

新井が降りる駅名ではない。次の駅名をアナウンスしている。

「勘違いかな」

地下鉄は、次の駅で止まった。新井は仕方なく地下鉄を降り、隣のホームに行った。こちらの車内はガラガラだった。だが新井は座らなかつた。降りるのは次の駅だ。車内アナウンスがあった。おかしいな。やはり、自分が降りる駅がとばされている。新井は、何回か同じことを繰り返したが、同じことだった。新井が降りる駅は消えて……“

どうしたのだろう。都筑は集中できないでいた。先ほどから誰かの視線を感じるのだ。

視線の方に目をやった。すると、少し離れたところに立っている老人と目が合った。痩せた老人だ。深く皺を刻んだ顔。目だけが異様に輝いている。都筑は慌てて目を逸らした。だが、その老人は、まだ自分を見ているようだ。気になるが目を瞑り筋立てを進めようとした。しかし、どうにも落ち着かない。

ふと目を開けてみた。都筑は驚いた。その老人が都筑の前に立っていたのだ。混み合った車内。都筑の前に来るには、かなりの乗客を押し退けなくてはならないはずだ。どうやって自分の前に来たのだろうか。そんな懸念を抱きながら、そっと目を上げると、老人は何やら親しげな表情で自分を見ていた。以前、会ったことがあるのだろうか。だが都筑には、全く見覚えがなかった。何となく薄気味悪さを感じる。席でも換わって欲しいのだろうか。だったら声を掛けるはず。都筑は目を逸らせた。

「失礼ですが、都筑さんでいらっしやいますか」

老人が、都筑に声を掛けてきた。

「は、はい。そうですか」

周りにいた乗客たちは、急に声を出した都筑に驚いた。隣にいた乗客は、変な奴の隣に座ったものだとも言いたげな顔で都筑を睨んだ。

「やっとお会いできましたね。お懐かしゅうございますな、平四郎殿」

平四郎殿？ 都筑はゾツとした。ボケが始まった老人だ。これから会社

に行くというのに何と言う日なのだろう。

「どなたか存じませんが、私は平四郎などという名前ではありませんが」
「オッホッホー、いや突然、お声をお掛けするなど失礼仕った。拙者、相澤兵衛と申す者でござる。平四郎殿は、都筑さんの遠いご先祖のはず。良く似ておいでだ。拙者、このようにむさい所は好みませぬ。外でお話ししたいが如何か」

ボケどころではない、ひよつとすると気が触れているのかもしれない。

「仕事がありますので」

「まー、そう言わずに」

都筑は、この老人にこれ以上関わりたくなかった。老人は、笑みを浮かべながら都筑の腕を取った。都筑は驚いてしまった。やせ細った老人でありながら、その力は強く、思わず体が浮きあがつてしまった。周りの乗客たちは、急に席を立った都筑を見たが、ホッとしたような顔になった。これで変な奴がいなくなる。

混んだ車内で老人と揉み合うのも余り格好の良いものではない。都筑は老人とドアの近くまで行き、次の駅で降りた。乗客には老人の姿は見えていなかった。

プラットフォームのベンチに二人は腰を下ろした。その老人、相澤兵衛が話し始めた。

「都筑さん、貴方のご先祖である平四郎殿のお話をさせてくださいな」

「……」

「お会いしたのは、慶長五年の関が原の合戦でした。平四郎殿は、実に立派な武将であられた」

都筑は、ゾツとした。この老人は狂っている。都筑は、老人から離れたかった。だが、立ち上がったとしても、また力づくで座らされるに決まっている。二人の側を乗降客が大勢歩いている。此処で騒がれても困る。都筑は、会社が気になったが、多少の遅刻で済むだろうと思い、仕方なく相澤の話を聞くことにした。

「実は、拙者、平四郎殿に命を助けられましたな。このようにご子孫にお会いできるとは嬉しい限りでござるよ。いや、お礼を申し上げます」

「相澤さんでしたね。申し訳ありませんが、私には全く事情が判りません。お礼を言われる謂れも判りませんし、もし宜しければ、これで失礼したいのですが」

「まあまあ、そう急くことも無いでしょう。何百年ぶりで都筑さんにお会いできたのだし」

相澤は都筑の腕を押さえた。やはり凄い力だった。この痩せた老人が何故これほどの力を出せるのか都筑は不思議だった。

「都筑さんも歴史の授業などでお聞きだと思いますが、関が原の合戦では日本が二つに分かれてましてな。私は豊臣方でした。平四郎殿は徳川方。つまり二人は敵同士じゃった。

合戦では大勢の者が入り乱れて刀を振るいましたよ。凄まじい戦いでした。どちらに味方しようかと傍観しておる大名もありましてな。それに裏切る大名もありました。どちらに付くかは家の存亡にも関わることに受けた恩義などに囚われていては、的確な判断は出来ません。卑怯といわれようが構わない。勝つと思う方に付く。これは家を守る大名たちにとつては当然のこと。

まさに天下分け目の合戦でしたわ。私は、徳川方の武将と刀を交えておりました。何としたことか、その武将が逃げましてな。敵に後ろを見せるなど武士に有るまじき行為。しかも相手は立派な兜をつけた武将。私は、この様な侍を見ると無性に腹が立つ性分でしたな。追いかけてましたよ。すると戦場から少し離れた小高い山の中に入り込んだのですわ。この山が、また背の高い熊笹に覆われておりましてな。いくら捜しても見つかることができない。

その時でしたよ、平四郎殿に出っくわしましたのは。逃げた武将など、どうでも良い。私は平四郎殿と向かい合いました。

互いに名乗りをあげ対峙しました。私は年取っておりましたが体が頑丈でしてな。道場などには通いませなんだが、何と言うか実戦の積み重ねと

でも言いましょうか、腕は確か。二人は刀を交えましたが互角の勝負でした。平四郎殿は、まだお若いのにも関わらず、いやー強かった。

辺りが暮れかけてきても勝負がつかない。二人とも力尽きてへたり込みましてな。息も絶え絶えでござったよ。戦場の方に目を遣りますと、どうやら思ったとおり徳川方の勝ちじゃった」

都筑は興味を持ち出した。ひよっとすると小説のネタに使えるかもしれない。

「で……」

「平四郎殿は、こう申された。此処に居ては危ない。お逃げなさい。戦いは終つておる。拙者の仕事も終つた」

「危ないとは、どういうことですか」

「落ち武者狩りじゃよ。手柄になりますからな。拙者も武将の一人でした。位は、それ程高くはありませんでしたが……。平四郎殿は、もう殺生はしたくないと申されてな。だが拙者、情けないことに動けんじや。平四郎殿も同じじゃった。面白いもので先ほどまで命をかけて闘った者同士なのに、互いの姿を見て何故か親しみのようなものを感じましてな。問わず語りで話し出しましたのじや」

相澤は、一人芝居のように語り続けた。懸命に耳を傾ける都筑だったが、通り過ぎる乗降客は、別に気に留める様子もなかった。

「相澤殿でしたな。お国はどちらで」

「都筑殿、拙者は三河の田舎の出でござる。元は百姓でしてな」

「ほう、また何故に武士になられたのか」

「太閤殿じゃよ。当時は、まだ木下藤吉郎殿であつたが……。古い話です。清洲築城の折に駆りだされましてな。世に言う墨俣一夜城ですわ。百姓は、どちらの味方でもありませんが、駆りだされれば行かざるを得ません。いや凄いい工事でした。たった一日で造れという。そのこと自体が無理

な話である上に、城を築く地盤が軟弱でしてな。幾ら土を盛っても駄目。ところが普請奉行は、何度も同じことを命じる。これでは埒が明きません」

「いい加減、馬鹿馬鹿しくなってくる……」

「如何にも。拙者、阿保らしくなりましてな。そこで普請奉行に具申ししました」

「ほー、それは勇気がおありじゃ」

「今、思い出しても良く具申したものだとも自分でも恐ろしくなります。百姓の分際で余計なことを申すなど、下手をすれば斬られますからな」

「在り得ますな。奉行としては、一時も無駄にはしたくないところ」

「私も若かった。多分、余程頭に來ていたのでしょうな。奉行の劍幕にも臆することはありませんでした。こう具申しましたよ。近所にある民家を壊し、木材や土壁を使えば良い。それに茅も使える。ただし、戦いが終わった後には元通りに家を建ててくれと。奉行は物凄い形相で睨みましてな。いやー斬られるかと思いました。だが聞き終わると、そこに控えておれとの言葉を残し、急いで本陣の方に行きました。ものの四半時も経ってはいなかったでしょうか、木下様の許しを得たと嬉しそうな顔で言いましたわ」

相澤は、あの頃は良かったとも言いたげな表情になった。

「なるほど」

「拙者、良く働きました。城ができ、さて帰ろうかと思いましたが、奉行から呼ばれましたな。本陣に連れて行かれました。何事が起こるのかと怖かったですわ。」

太閤殿は床几に座っておりまして。話には聞いていましたが本当の猿かと思ってしまうましたよ。小さな体で、顔は皺だらけ。しかも満面笑み。猿が笑っているようでしたわ。

太閤殿は、よう来た、よう来たと言いましたな。拙者を手招きされました。見れば太閤殿も泥だらけ。ご自分も畚を担がれたんでしょうな。偉いお方だと思いましたよ。そばに行きますと、褒美を取らすと、懷から扇子を取り出して手渡されました。

都築殿、拙者、その時、ふと太閤殿の右手を見たんですわ。何と指が六本。親指の内側にもう一本指がありました。驚きましたよ。しかし、このお方は、もっと偉くなるのではと思ひましてな。総てに普通ではないお方ですわ。いかんいかん話が逸れてしまった。その折ですわ、どうじゃ武士になる気はないかと聞かれまして」

「で、お受けになった」

「如何にも。百姓でも武士でも、いずれ人間は死にますでな。武士でもやってみるかとの気軽な考えでした。それに此処だけの話でござるが、あのような武士でも普請奉行が務まるのであれば拙者の方が良いのでは、などと……。自惚れておりましたな」

「では普請奉行所でお勤めをなさったので」

「百姓は、その名の通り何でもこなします。家も納屋も水車も造ります。川の流れも詳しいし土手なども補修します。奉行は、何でも聞きにきましたよ」

「では、出世も早かったのでしょうか」

「今、普請奉行を遣っております。そのためか朝鮮出兵にも加わりました」

「ほー、これはまた」

「都筑殿もご存知のように、戦さでは、陣営や砦などの設営が必須。それだけではない、敵の城を壊す術も必要ですからな。戦さというと駆り出されましたわ」

「で、朝鮮はどうでござった」

相澤は、話すかどうか躊躇った様子をちらつと見せたが続けた。

「惨い戦いでした。太閤殿は、世の中を統一したお方。優れたお方じゃったが、年を取ってからがいけなかった。女子に手を出すわ、利休に切腹を命じるわ。少々頭がおかしくなっていたのかも知れませんか。

太閤殿の魂胆は、朝鮮を足掛かりに、さらに日本を広げようとのもの。誰の目にも無理なことと判っております。しかし、誰も出兵を止めることはできなかった。朝鮮では、酷かった。人間の醜さ、残酷さを絵に描いたようなものじゃった。所詮、無茶な魂胆。いくら頑張ったとて、あの大

きな大陸を……。結果的には無駄な出兵になるのは目に見えております。意義を感じぬ殺生ほど空しいものはござらん。

程なくして太閤殿は亡くなられた。太閤殿が死に、朝鮮への出兵は全く意味がなくなつた。たった一人の人間の妄想で大勢の人間が殺される。この空しさは例えようもないものでござつたよ」

「武士、侍とはそのようなもの」

「空しさを感じた時、武士を辞めたいとも思いましたが……ひと度、侍を知りますと、その生き方にも捨てがたいものがある。そこで今日までずるずると……。朝鮮から帰り、空しさの中に生きておりました」

都筑と相澤は、ベンチに腰掛けたままだ。相澤は、ここまで語るとふーっと息をついた。都筑は夢中になつて聞いていた。

「相澤さん、話はまだ終っていませんよね。続けてください」

相澤は都筑の顔を見た。

「都筑さん、貴方にお話したいことは、これからなんです」

都筑の頭には、既に出社時間のことなどなかった。

ラッシュアワーを迎え、プラットフォームは、忙しく行き交う乗降客で溢れていた。乗降客の中には、ベンチに座り、なにやら一人で話をしてゐる都筑を怪訝そうな目で見る者もいた。

相澤は、語り出した。

「相澤殿は、此度の戦いで豊臣方におつきになったが、趨勢は徳川方。何故に……」

「申される通りでござる。だが武士に取り立てくれた太閤殿への恩とでも言いましょうか、大阪方に……。実を申しますと、拙者、この戦いで死んでも良いかと思ひましてな。余りにも空しい人の世。だが自ら命を絶つは卑怯な行い。ましてや刀を交え、自ら斬られるなど相手に対し失礼千万。真つ当に戦うつもりでおりました。都筑殿はお強いですな。死に損ないましたわ」

「いや相澤殿もお強い。拙者、足腰が立ちませぬ」

二人は、顔を見合わせニヤツと笑った。

「ところで都筑殿は、生粋の武家のお生まれとお見受けいたしました」
「拙者は、代々神津藩の勘定奉行が任でしてな。真面目にやっております」

「ほう、勘定奉行とは重い仕事ですな。都築殿は、空しさなどを感じたことはないのでしょうか」

「これはこれは。空しさとは異なお話。そうですね。拙者、仕事一筋でござるが……。拙者自身が空しいと思ったことはござらん。ただ……未だ口にしたことはござらんが、武家とは窮屈なものと思うこともありますな。総てにおいてお家が大事」

「それは武家の本分」

「如何にも。お家あつての侍でござる。それはそれで良いのだが……」
平四郎は、打ち解けた表情になり話を続けた。

「だが、人間には自分でも如何ともし難い感情というものがございますからな。これが厄介……」

「都筑殿、話が見えぬが。何をおっしゃりたいのかな」

「いや、失礼した。男と女の話でござる」

「ほー男と女の話でござるか。これはまた」

「この様な大きな戦の後で、はしたない話と思われるかも知れませぬが」
「何を、そのような」

「武家に生まれた者は、好きな者が居たとしても一緒になれませんか。何代か前に起こったことです。我が一族の恥とでも申しますか」

「確かに武家とは窮屈なものでござる。都筑殿、家の恥と申されたが拙者ごときにお話するのはまずいではござらんか」

「お気に召さるな。貴殿とお会いたのも何かの縁。この話、今まで人様に語ったことはござらんが、何やら拙者の胸に重く残っております。良い機会でござる」

「では遠慮なく。して、その話とは、ご自身のことですか」

「いや拙者のことではござらん。幼き頃に聞いた話でござる」

平四郎は、何かに急かされでもしているように語りだした。

「曾祖父の弟に数衛門と申す者がおりましてな。拙者から数えて三代前の話でござる。この数衛門だが、ご家老の奥方様との不義密通が元で藩を出奔しましてな」

「これはこれは、不義密通とは穏やかではござらん。その数衛門殿だが……。何やら聞きとうなりますな」

「ご家老は、奥方様を手打ちに、数衛門には討手を出しましてな。曾祖父は、数衛門を庇おうとしたそうですが、多勢に無勢。それに数衛門は迷惑が掛かってはいけなと、すぐに家を出たそうでござる。何人もの討手を斬ったそうですわ。その後、藩から出奔いたしました」

「数衛門殿は、お強かった」

「如何にも。拙者も継いでおりますが、右上一刀流の遣い手でしてな。曾祖父は、何も手助けできなかった己を責めたそうですわ。だが如何に考えても、不義密通などをする弟とは思えない。曾祖父は理解に苦しんだ。それに、このまま放っておいては都筑家の恥。しかし、事情を聞こうにも数衛門は行き方知れずだし、奥方様はご家老により成敗されております。そこで八方手を尽くして真相を探ったと聞いております」

「なるほど。放って置けば不義密通を犯した一族との汚名が残りますからな」

「曾祖父は、数衛門と奥方様が幼き頃、遊んでおったことは知っていたそうです。つまり幼友達であった。ところがでござる。数衛門が奥方様にお会いしたのは幼き頃のみ。物心付いた頃より以降は、二人は顔も合わせていないとのこと。不義密通などありえるはずがなかったそうでござる。どうやら、これは謂れない噂だったようです」

「なにつ、謂れなき噂。それは酷い……」

「この件があつて後、ご家老は体調を崩し、急ぎご子息が家督を継いだそうでござる。しかし曾祖父は意を決し、隠居したご家老に面会を求めた

が、ご子息は拒んだそうです。ところが曾祖父の執拗な要求に負けたのか、内密の話をされた。驚いたことに、ご家老は体調を崩したのではなくお氣が触れたとのこと。ご子息は、会つても意味がないと申したそうでご
ざる」

「しかし、氣が触れたなどと……父親のことをよく話したのですな」

「家督相続も問題なく済んだためでしょう。形の上では、ご家老が家督を譲ったことになっておりますが、総てご子息が差配したと思います。曾祖父は、ご子息に聞いたそうです。不義密通は本当にあつたのかと」

「……」

「ご子息は口を噤んだが、曾祖父は詰問した。すると、ご子息は烈火のごとく怒りだし、家人を呼んで曾祖父を追い出したとのことでござる」

相澤は腕組みをして聞いていた。二人の間に、しばし沈黙があつた。

「なにやらその噂が総てのようですな。だが何故、そのような噂が……」

「しかとは判りませぬが、教衛門に原因があつたとも考えられます。教衛門は、次男。ご存知のように長男以外が身を立てるには他家への婿養子が必至。教衛門には幾つもの縁組話があつたそうですわ。だが、教衛門は全く耳を貸さなかつた。周りの者たちは、不思議があつたそうですが、これが奥方様を思うがためとの噂に繋がつたそうでござる。幼友達であつただけなのに」

「口さがない世間でござるな」

相澤は、何か言いたげな様子だが言いよどんでいる。

「相澤殿、遠慮せず申されよ」

「いや、何ということはございませぬ。だが、しかし、いや……何でもござらん」

「如何いたした。途中で話を止めるとは」

「失礼した。うーん、有体にお聞きしよう。ところで教衛門殿は、どうであつたのでしょうか」

「どうとは？」

「真実は」

「これはまた。相澤殿も気になるようでござるな。拙者も数衛門の気持ちを推し量りましたが、どうやら……」

「お慕い申していた」

「……」

相澤は、平四郎の話を聞きながら奇妙な思いに囚われていた。かなり昔の話であり、しかも平四郎は、人伝に聞いただけのはず。ところが、平四郎は、昨日の出来事のように語っている。その語り様は、曾祖父や数衛門、さらには成敗されたという奥方になりきっているのである。まるで当の本人たちが乗り移り、語っているようであった。

相澤は、その事が気になり平四郎に聞いてみた。平四郎は、なにやら因縁めいたことを話してくれた。

平四郎が語り終わった頃には、夜も白々と明けようとしていた。

「では、その平四郎と言う人が、私の先祖だとおっしゃるのですか」
「如何にも」

都筑は、数衛門の話を聞き、小説を書くこうと思った。

「相澤さん、その奥方の名前を教えてください」

「奥方の名前？ おうそうじゃった。平四郎殿から聞いておる」

相澤は、しきりに上を向いたり顔を下に向けたりしている。必死に思い出そうとしているようだ。都筑はイライラした。小説であれば何も実名など使わなくても良い。自分で奥方の名前を考えれば済むことである。だが、どうしても聞きたかった。

「くみ……。平四郎殿は、確かくみ殿と言っていたはずじゃ」

「くみですか。どのような字ですか」

「やはり気になりますか。私も同じじゃった。おう、はっきりと思い出しました。久しいに美しいで久美」

久美……。都筑は、この名前を頭の中で繰り返していった。すると、都筑の頭の中に霧のようなものが現れてきた。霧は徐々に形を成していった。

どうも女の姿のようだ。その姿は鮮明ではなかったが確かに女であった。無表情なようだが、わずかに寂しさを漂わせている顔。都筑をジーツと見つめている。おぼろげに見えるその女は、淑やかな姿をしていた。だが、何故だか判らないが、都筑は、そのおぼろげな中に強く女を感じた。

都筑は記憶を辿った。知り合いの中に似たような女は……写真とかテレビで……だが誰にも似ていなかった。その女は初めて見る女だった。都筑は、思わず小声で久美と呼んでみた。すると、その女が微笑に笑えんだように思えた。まさか……久美なのだろうか。都筑はブルツと頭を振った。女は目の前から消えた。だが、その霧のような面影は都筑の胸に残った。

「相澤さんは、その後、どうしたんですか」

「その後？」

「平四郎と、どのように別れたのですか」

「おう、そうじゃった。夜が明けると二人とも動けるようになりましてな。平四郎殿は早く逃げろとおっしゃった。拙者、名残惜しかったが、お言葉に甘えましてな。ではご免と挨拶し、その場を離れました。

落ち武者は辛いものでしてな。勝ち組の武士だけでなく百姓までが恩賞目当てに首を狙いますのじや。二日目でしたか、雑兵に囲まれましたな。五、六人いましたが、三人ほどを斬りました。ところが、一人が突き出した槍が胸を通しました。一瞬、息が止まり、総てが真っ白になりましたよ。と、同時にどうした訳か体がふーっと軽くなりましてな。不思議なことに刀の重さも感じません。何やら急に元氣になりました。残りの雑兵を斬り倒し、生きのびましたのじや」

「ではそれ以後、ずっと生き続けている」

「ま、そのようですな」

そう言うとき相澤は、ホッホッホーと一際大きな声で笑った。都筑は周りを気にしたが、プラットフォームにいた通勤客は、誰一人として気付いていないようだった。

相澤は、確実に狂っている。都筑は、そう思った。何百年もの間、生き続ける人間などいるはずがない。だが、相澤の話は良くできていると思った。

「都筑さん、このように平四郎殿や数衛門殿の話をお伝えできた訳じやが、これも平四郎殿へのお礼と言えますな。いや良かった良かった」

都筑は時計を見た。長い語りであつたにも関わらず、どうした訳か数分も経っていないかつた。

「相澤さん、では私は会社に行きます。今日は、ありがとうございました」

相澤は、ちよつと疲れたような表情でベンチに腰掛けたまま、では、またと言つた。

「都筑さん、今日も妄想してたんですか。……都筑さん」

「えつ、あー、おはよう。小島さん」

「やだー。心、此処にあらずつて様子ですよ」

「ごめん。ちよつと考え事をしてんだ」

「今朝は出社が少し遅かつたので心配しちゃいましたよ。今日も忙しいんでしょう。頑張ってくださいね」

「う、うん。判つた」

仕事など全く手に付かない。相澤から聞いた話が、頭の中をグルグルと廻っていた。久美、そして数衛門……。

その夜、都筑は、ベランダで空を眺めていた。冷たい夜風。空には三日月……。

都筑は三日月を見ていたが、

——久美

と呟いてみた。

すると霧のようなものが夜空に浮かんできた。都筑は、久美だと思つた。都筑は身じろぎもせずに見ていた。プラットフォームで頭に現れた霧

と同じだ。霧は、徐々に着物姿の女に変わっていった。そして、久美の姿がくつきりと現れた。その着物姿には清々しさが漂っていた。淑やかな容姿。だが都筑は、着物を通して久美の姿に、僅かにだが肉感的な感じも受けた。

久美の顔が、はつきりと見えた。うりざね顔で目は大きく、額は広く理知的な雰囲気を感じさせる。唇は、小さめでやや肉厚。ぽつてりとした感じがする。目が印象的だ。愁いを帯びた目。

都筑と久美は見つめ合った。都筑は、久美の目に、何やら強い意志と言うか、何かを訴えたいようなものを感じた。

久美が微笑み掛けてきた。いや、都筑には、そのように見えた。そして、久美がふっと唇を動かしたように思えた。何を語りたいのだろうか。都筑は、必死になって耳を傾けた。だが、久美は微かに笑みを残したまま、すーっと消えた。

都筑は、相澤の話を思い出した。久美は、謂れない不義密通の疑いで夫である家老に殺されている。どのような気持ちであったのだろうか。口惜しいと思ったのだろうか。恨みを抱いたのだろうか。それに数衛門をどのように思っていたのだろうか。久美も噂を耳にしたことがあるのだろうか。耳にしたとすれば迷惑と思ったのか。それとも嬉しいと……。

都筑に、判ろうはずがない。

数衛門と平四郎にも思いを馳せた。先祖は平四郎である。数衛門との血の繋がりは薄いと都筑は思った。だが僅かであっても、自分には確実に数衛門と同じ血が流れているはずだ。

謂れない噂のために国を出なければならなかった数衛門。親しい友を斬らざるを得なかった数衛門。都筑は居たたまれない気持ちになった。そして、数衛門に対し、同情にも似た親近感を感じ出していた。

久美は、ただ殺されたままだったのだろうか。数衛門は何処かで野垂れ死んでしまったのだろうか。

それでは余りも惨い。

憤りすら感じてきた。都筑は、今とは時代が違うと必死になって自分に

言い聞かせた。だが、数衛門と血の繋がりがあろうと思つと、無念さに似た感情は消えてくれなかった。

都筑はブルツと身震いをした。随分長い時間、ベランダに居たようだ。体は冷え切つていた。だが、もう一度、夜空を見上げた。

すると頭の中に、寒々とした光景が浮かんできた。何処までも続く薄の野原。その中を寂しげな姿の侍が歩いていた。

その侍は、都筑数衛門だった。

『薄が原』

冴えわたつた寒空には、斬り裂いたような細い三日月。月の周りを星が取り巻いております。灯りがなくとも、なんとか歩けるほどの明るさ。そして、多少の起伏はあるものの何処までも、原っぱが続いております。木立と思えるものもございません。あるのは人の身の丈ほどの木が数本。どの木も枯れております。

その原っぱを薄が覆っております。見渡す限り、茶色に枯れた薄の葉と白い穂ばかり……。たまにヒューツと冷たい風が薄を揺らし、カサカサと音を立てております。そんな薄が原を、一人の侍が力ない足取りで歩いております。

体格はガツシリとしておりますが、埃まみれの着物や、もう何日も手入れをしていない月代や垢だらけの顔付きから、この侍が長旅の途中であることが判ります。疲れきつた様子は、今にも倒れてしまうのでないかと思うほどでございます。

すでに夜も深くなっておりますが、軒先を借りる家もなく、寢床にならずそうな小屋もございません。見渡しましても、雨露をしのげそうな木立もございません。薄を敷き詰め、寢床代わりにしてはと思つてみたものの、この寒さには勝てそうにもなく、ただ歩き続けるしかございません。ここ数日、何も食べていない体にこの寒さはこたえます。

この侍が背中をまるめ、トボトボと歩いておりますと、遠くの方に小さな家のようなものが見えてまいりました。ひよっとすると寝床が、とても思ったのでございましょうか、この侍は近づいていったのでございます。そばまで辿りつき、家を見たのでございます。茅葺屋根は、あちらこちらの茅が抜け落ちております。それに柱だけでなく家も傾き、今にも壊れてしまいそうなたたずまいでございました。

しかし、不思議なことに、障子だけは出来上がったばかりのような綺麗な様子しております。真つ白な障子紙。壊れかかった家には、余りにも不釣合いな障子でございます。人氣は全くありません。聞えるのは風にそよぐ薄の擦れ合う音だけ。綺麗な障子を見ますと何やら薄気味悪さを感じてしまい、さすがに中に入ることも出来ません。この侍は、しばし佇んでおりました。

この侍は、都筑数衛門。甲津藩五十万石の勘定奉行を勤める歴とした家柄の侍でございました。世の中とは恐ろしいものでございます。数衛門は、謂れなき噂が元で脱藩し、今は諸国を彷徨う、浪々の身でございます。

数衛門は、小さき頃から体は丈夫。しかも頭も良く、凛々しい姿は藩内でも評判でございました。文武両道に長け、特に剣術では右上一刀流の遣い手として名を馳せておりました。

この右上一刀流は、上段に構えた刀を右にほんの少し傾かせた形で相手と対峙いたします。右八双に似ておりますが、腕はまっすぐに伸ばします。相手が踏み込んだその刹那、右上から一刀のもとに相手を袈裟懸けに斬り倒す剣法でございます。対峙した者と刀を交えることは、ほとんどございせん。左利きであればまだしも、侍は右利き。自然、左側の防御は弱くなるものでございます。対峙した者は、刀が自分の左首筋と肩のあたりに振り下ろされることが判りますので、防御ばかりが気になってしまいます。数衛門に踏み込まれば斬られるのは必至。身動きが取れなくなっ

てしまいます。構えたままで時間が過ぎていきますが、じっとしている訳にもいきません。落ち着き払った数衛門の姿が、次第に大きくなつていくように感じてまいります。このままではいけないと、やむなく踏み込みますが一瞬の隙をつかれてしまいます。

甲津藩において、数衛門の右に出る剣術遣いはありませんでした。

いくら優秀であっても、家を継ぐのは長男でございます。数衛門は次男。部屋詰め的身でございました。身を立てるには、他家の婿養子となる以外に道はございません。

文武両道に優れ、見栄えも良い数衛門でございます。元服後、いろいろな話がありました。

「数衛門、おぬしの仕事ぶり、剣道に対する真摯な姿勢、父としても快く思つておる。だが、このままでは埒があかんのではないか。どうだ、此度の話にも実に良い縁組話。先方は武具奉行の家柄。ゆくゆくは奉行になれる話じゃ」

「お父上のおっしゃる通りです。母としても数衛門のこれからが気掛かりでなりません。此度のお話し、また、お断りでもすれば、もうお話しは来なくなりますよ。そろそろ身を固めたらどうですか。これっ、数衛門、聞いているのですか」

「父上、母上、数衛門は、今のままがよろしいのです。お勤めも剣道も楽しいものです。お部屋を使わせていただいておりますが、ご迷惑でなければ、今少し……」

「部屋のことなどは、どうでも良い。ましてや迷惑などと。おぬしのこれからが問題なのじゃ」

「数衛門、貴方、好きなお方でもいるのですか」

「いえ、そのようなお方はおりません。どうか、兄上が都筑家をお継ぎになるまでは、このまま数衛門の我ままをお聞きくださいませんか」

幾度となく交わされた同じような会話。そのうちに両親は、数衛門の縁

組みを諦めてしまったのでございます。

親類縁者、周囲の者は、良い話がありながら、何故、数衛門が独り身を通すのが理解できません。

町を歩けば、何人もの女が目を留め、数衛門を見遣ります。客を相手にする女たちも何やかやと声を掛けることがございます。ですが、数衛門は真面目に受け答えるだけ。では拙者はこれでと、取り付く島もございません。

当然のことながら浮いた話もございませんし、ましてや遊郭などに足を運ぶこともございません。周りからは不思議がられますが、当人は一向に気にもかけていない様子。

数衛門は、勘定役として面倒な仕事も自ら進んで引き受ける仕事振り。同僚たちだけでなく、上役からも頼られるほどでございました。道場におきましては師範代を務め、剣道に汗を流す毎日でございます。

ところが、数衛門が二十三、四歳の頃でしょうか、在らぬ噂が立ち始めたのでございます。

「数衛門様は、久美様がお好きだったのよ。きっと……」

久美は、数衛門より五つ年下。屋敷は、都筑家と通りを挟み、はす向かいにございました。久美は、幼き頃、数衛門と遊んだことがございます。しかし、数衛門の元服後は、挨拶をすることすらございませんでした。

何故、そのような噂が立ったのか、理由は定かではありません。しかし、見栄えの良い数衛門が、相変わず独りでいることに、周りの者が興味を持ったのかも知れません。これは領けることでございます。幾つもの縁談を断ったこと、興味を示す女子も居ないことなど、とかく下世話な話にのぼってしまうのも致し方ないことでございます。

数衛門の幼き頃を知っている者が口を開きました。

「そういえば、数衛門は、久美とよく遊んでいたが」

数衛門に美しい久美を並べてみますと、お似合いの二人が出来上がつてしまします。

「数衛門は、今でも久美を好いている。だから縁談を断るのではないかいや、そうに決まっている」

勝手な思い込みではありますが、噂をする者たちにとり、これで辻褄が合うのでございます。特に数衛門に興味を持った女たちは、まるで自分を納得させるかのように、この噂を吹聴したのでございます。口から口へ、噂は広まっていたのでございます。

久美は、十五歳で家老横田主計の元に嫁ぎました。主計は、美しく育つた久美を見た途端、権力にものを言わせて嫁にしてしまったのでございます。

主計は、辣腕家。しかも熱心に藩政に取り組みましたので藩の財政も豊か。よく出来た家老と、藩内だけでなく他藩からの評判も良かったのでございます。しかし、権力者にありがちな人間でもありました。部下に限らず周りの者には傲慢な態度で接します。ややもすれば、人を人とも思わぬところもございました。家老という重責を担う者として仕方がないと言えなくもございません。ですが、あらゆる事、あらゆる人に対して同じような姿勢なのでございます。仕事をしている時はともかく、仕事を離れますと親しく語りかけてくる者などはありません。これは当然のことと申せませす。ですが、主計は、そのようなことを全く気にする風もございませんでした。

久美の父親は、主計から久美が欲しいとの申し出を受けましたが、出来れば断りたい思っておりました。主計は、権力、財力を持っております。本来であれば玉の輿ともいえる話。しかし、父親は主計の人間性に疑問を持っていたのでございます。心優しい自分の娘を嫁がせたとしても、幸せにはなれないのではないか。ところが、役職は寺社奉行所寺社役。家老の

話を断るなどもつての外でございます。

久美を気遣い、なかなか話しだせずにおりましたが、主計からは矢のような催促。ある日、意を決して久美に話したのでございます。久美は、何らの感情も示さずに口を開きました。

「お父上様、お父上様の宜しきよう、お応えいただけますでしょうか」

久美を娶った主計には、今まで見せたこともないような笑顔があったのでございます。主計は、久美の美しさを自慢いたしました。それに久美を大切に扱ったのでございます。笑顔で久美のことを話す主計。周囲の者は、人とは変わるものだなどと呆れ顔で話すほどでございました。

ところが、二年ほど経ちましたが、主計は久美を理解できなかったのでございます。

久美は、自分に心を開いてはくれない。二人でいる時にもあくまで礼儀正しく、まるで、部下のように接する。

主計は、心の底からなつかない久美に寂しさを感じておりました。それほどばかりか、自分に対し、全く感情を表に出さない久美を、不思議な女だと考えることもあったほどでございます。

そんな折、主計は、家臣が話す噂を耳にしてしまったのでございます。

「久美殿は、数衛門を慕っているようござる」

主計は驚きました。しかし、久美についてはあらゆることを調べております。数衛門とは幼友達だけであつたはず。物心ついた頃から、二人は会ってもいないはず。噂は何かの間違いにちがいない。このように自分を納得させたのでございます。

日が経つにつれ、何とはなしに城内の者たちの態度が変わってきたことに、主計は気が付いたのでございます。

噂が広まったのでございましょうか、今までですと廊下などですれ違う時、相手は頭を下げ、主計が通り過ぎるのを待ちました。ところが、近頃は、チラッと上目遣いに自分を探るような雰囲気を感じるのでございませう。

噂について、主計にも思い当たる節がございます。

—— 久美は心からなついていないが……。まさか……

猜疑心とは恐ろしいものでございます。一旦、人の心に住みつきますと簡単には消えません。いえ、むしろ日に日に育っていくものでございませう。些細な事、取るに足らない話なども猜疑心を煽ってしまいます。消そうと思えば思うほど、返ってその事が大きく膨らんでいくものでございませう。

主計に親しい友がいたとすれば、噂のことなどを話すことが出来たかも知れません。ですが、仕事のほかに口を利く者もない主計でございませう。一人で考え込む以外にございせんでした。あれほど久美を自慢げに話していた主計ですが、また以前のような主計に戻っていったのでございませう。

主計のお酒の量が増えてまいります。

—— まさか、久美と数衛門が……。いくら数衛門が仕事にも刀にも優れているとは言え、ただの部屋住みの身ではないか。わしとは違う。ましてや、二人は幼い頃に遊んだだけの仲ではないか。久美が心を奪われることなどあるはずがない。下らん噂だ。このわしが噂を気にするなど、どうかしている。

これで落ち着きはいたしますが、今度は、数衛門について聞いた話が気になってまいります。

—— いや待て、数衛門は良い婿養子の話があっても耳を貸さないと。このままで良いと言っているようだ。このまま？ このままとは、どう言うことなのだ。

主計は腕組みをして、あれやこれや考え込む毎日が続いたのでございます。考えることは数衛門の心情と久美でございました。

——久美とは会えないが、同じ城下で久美だけを心に思い、暮らせればそれで良い……。そんな馬鹿な。そのような男が世の中にいる訳がない。だが待てよ。久美はわしに心を開いていない。まさか、久美も数衛門と同じように考えているのではないか。会えなくとも良い、誰の嫁であっても良い、数衛門だけを心に……。そのような事があろうはずがない。子供であればまだしも、大人ではないか。

しかし、振り切っても振り切っても、同じ事が頭に浮かんでまいります。まさかまさかの連続でございます。

自然、藩政にも以前のような迫力が感じられなくなっております。廊下で人とすれ違う時は、主計の方が俯き加減で目を合わせないようになってまいりました。あの傲慢で居丈高な主計は何処に行ってしまったのでしょうか。

こうなりますと、周囲の者は、口さがない話をし合うようになってまいります。

「あの噂は、本当なのかもしれない。主計殿も気にしている様子」

「最近、元気がないように見受けられるが……」

「ひよっとすると、あの二人は密かに逢っているのでは……」

猜疑心は自分勝手に大きくなっていくものがございます。同じように噂話も真実から離れた方向に広がっていくようでございます。

噂話、そして、このような周囲のつぶやきが、日を追って大きくなっていったのでございます。

主計の頭の中には、猜疑心と噂が渦巻いております。寝ることもできず、考えることは久美と数衛門のことばかり。お酒を呑み、忘れようといたしますが、呑めば呑むほどに久美への猜疑心が募ってまいります。

久美を見れば、今まで通りの久美であります。

—— いやまで、何かあるのではないか、何か……。

お酒をしたたかに呑んだある夜のことでございます。主計は居ても立つてもいられず、久美に訊いてしまったのでございます。

「数衛門に逢っているのか」

久美が驚くのは当然でございます。

「お話しをいたしましたのは、幼き頃のみ。既に長きにわたり、お顔を拝見したこともございません」

この夜は、これで治まりましたが、お酒を吞みますと主計は同じことを久美に訊くようになっていったのでございます。久美の答えはいつも同じでございます。日を追って主計の問いかけは、詰問に変わっていったのでございます。事実、数衛門と逢ってなどいない久美は、冷静にいつも同じ答えをいたします。

同じ詰問に対し、判で押したような同じ答えの繰り返し。これが、さらに猜疑心を煽ってしまいます。猜疑心とは、そう言うものでございます。

嫁いだ後、久美は広大な屋敷から外に出たこともございません。綺麗に造られた広大な庭を見たり、散策したり、腰元たちと琴を奏でたり、歌を詠んだり……。この事は、主計も知っているはずでございます。

恐ろしいことに、繰り返し湧き出てくる猜疑心は、その人間の理性をも壊してしまうようでございます。そして、単なる疑いを事実へと変化させてしまうようでございます。主計にとり、久美と数衛門が逢っていることは事実となってしまうのでございます。

ある夜、主計は、いつものように久美を詰問いたしました。いつもと同じことの繰り返しでございます。

床についた久美の寝屋に、酒を呑み、醜く浮腫んだ顔の主計がやってまいりました。主計は体を求めますが、久美は疲れ果てております。

「お殿様、今夜は、ご勘弁を」

それを聞いた主計は、何も言わずに部屋を出て行ったのでございます。

ほどなくして刀を手にした主計が戻ってまいりました。久美を揺り起こし、無言のまま久美を斬り捨ててしまいました。すでに主計は狂っていたのでしょうか。久美を斬った後、その場に呆然と立ちずくんでおりました。

物音を聞きつけた腰元がやってまいりました。

「久美様、久美様、どうかいたしましたか？ 恐れ入りますが、お部屋に入らせていただきます」

腰元の叫び声に、数名の家人が部屋に入ってまいりました。そこにいたのは、血が滴る刀を持った主計と、無残に斬り殺された久美の体でありました。

主計は、ハッと正気に戻り、自らが犯した事実が付いたのでございます。なんて事を！ 主計は、叫びます。

「久美めが、白状しおった。数衛門と逢っておったとな。許すことは出来ん、不義密通じゃ！ 久美は、わしが斬った。数衛門を成敗せよっ！」

家老の命を受けた討手たちが、都筑家の門を叩いたのでございます。家人は、暫しお待ちをと押し止めようと致しましたが、血相を変えて押し込んできた討手でございます。なす術もございません。討手たちは家人を振り切り、数衛門の部屋に入ったのでございます。

「都筑数衛門、ご家老の命により切腹を申し付ける。さもなくば我らが成敗いたします」

数衛門は、ただ驚くばかりでございます。

「何をもって切腹と申されるか。ましてや成敗とは……」

「黙らっしゃい！ ご家老ご正室、久美殿との不義密通。切腹のご沙汰は

武士の情。ありがたく頂戴いたせ」

身に覚えのない不義密通。

数衛門も噂を耳にしたことがございます。直ちにこの事態を掴みました。数衛門の身の動きは素早いものでした。両刀をつかみ、障子を蹴破り表に飛び出たのでございます。

討手は、数衛門に斬り掛かりますが、右上一刀流に適おうはずもございません。

数衛門は、家に迷惑が掛かつてはいけなないと、少し離れたところにある空き家に竈ったのでございます。

何人もの討手が、空き家を取り囲んだのでございます。中からは物音一つ聞こえてまいりません。討手たちは、一斉に攻め入ることは出来ません。そのようなことをすれば同士討ちをしてしまいます。一人、または二人で家に入りますが、入った者はいくら待っても出てまいりません。刀を交えた音も聞こえてまいりません。叫び声も上げずに斬られたのでございます。右上一刀流に敵う者はいないようでございます。傷ついた討手が、家から這い出してくることもございましたが、入り口で息絶えてしまいます。家の周囲には血の匂い。幾たびも同じように討手が家に入りますが、結果は同じでございます。

数衛門には、申し開きの機会も与えられませんが、あろうはずもございません。止む無く襲ってくる討手を斬りますが、何の罪もない者たちでございます。

数衛門は、せめて親には事実無根であると話したかったのでございますが、家に近づくこともできません。

数衛門は、総てを諦めたのでございます。

ある新月の夜、数衛門は討手の隙についてこの家を出たのでございます。そして、藩を捨て、旅立ったのでございます。

——これがこの世の出来事か。なんと世の中とは理不尽なもの。愚かな人間の猜疑心から、何らの罪をも持たぬ久美殿が殺された。私は藩を捨てざるを得なかった。しかも、討手となった自分の友と、刃を交えなければならぬ。刀を抜き対峙すれば、友であっても刀は何の躊躇もなく友を斬ってしまう。自分の意志とはかけ離れた所作が、自然と出てしまう。謂れない噂。自分に罪があるのだろうか。

どのように考えたところで、自らの非を見つけることなど出来ません。

——だが、このような事にて、むざむざと斬られる訳にはいかない。

旅には出たものの、討手は執拗に追ってまいります。

——何人の友を斬ったであろうか。私は人を信じすぎた。身を綺麗に毎日を通せば人に迷惑は掛けないと思っていた。ましてや、自分に災いなど降りかかるとは思ってもいなかった。もうご免である。これからは降りかかってきた火の粉は、どのような小さなものであっても、まず消すことにする。そのために人を斬っても構わない。一人を斬るだけで済むではないか。

すでに路銀もなくなり、野宿の連続でございます。柿の木を見つければ、柿を取りむさぼり喰う。兎や野鼠が走れば、手裏剣で仕留めて火に炙って喰う。お地藏さんに供えられた握り飯を喰う。すでにおお食と同じでございます。ただ、人の家から食べ物盗むことはございませんでした。どのようにひもじくとも、まだ理性だけは残っていたのでございます。

このような状態であっても、討手と対峙いたしますと、刀は信じられない程の鋭い動きを見せてしまいます。数衛門自身、このような自分が判らなくなっております。

——どうすれば良いのじゃ。

薄が波打つ原を、トボトボと歩き続ける数衛門でございました。ここは、神津藩の領地でございました。諸国を放浪しておりましたが、いつしか国に戻ってしまったのでございます。しかし、数衛門は気が付いており

ません。

——何故、障子だけが綺麗なのであろうか？

人気などは全くなく、何の気配も感じません。数衛門は、障子を眺めながら、ただ、じっとしておりました。

その時、障子にボーと灯りが映ったのでございます。誰かが蠟燭を燈したのでございましょうか。

——人が居る。

数衛門の驚きは、大きなものでございました。剣の道を極めた者は、殺気だけでなく、人の気配を感じ取る、研ぎ澄まされた神経を持っているものでございます。先ほどまでは、全く気配すら感じなかったのでございます。

しばし呆然と、明るくなった障子を眺めておりましたが、障子に影が映りました。すっきりとした女の影でございます。影から察するに、鬘を結い上げ、身のこなしも淑やかな女のようにございます。数衛門は、ただ見つめているだけでございました。

影が大きくなり、そして、小さくなりました。女が障子に近づき、そして障子の前に座ったようでございます。

そして、静かにゆつくりと障子が動いたのでございます。

数衛門が見たのは、三つ指をつき頭を下げている女でございました。女が、ゆつくりと顔をあげました。

「数衛門様、ようこそ」

——久美殿！

其処に居たのは、美しい面持ちの久美でございました。驚きの余り、数衛門は言葉を出すこともできません。

——久美殿は、主計に殺されたはず。ということは……。
数衛門は、この時、総てを理解いたしました。

「数衛門様、お久しゅうございます。このようにお逢いできますのは何年振りでございますようか。やっと二人になれました。数衛門様、どうされたのですか？ そんなにビックリされたお顔をして……」

余りにも美しく、幸せそうな面持ちの久美でございます。

数衛門の感動は、計り知れないほど大きなものでございました。ですが身動きなど出来ようはずがございません。ただ、呆然と立ちすくんでいるだけでございます。

「数衛門様、お風邪をおひきになりますよ。さつ、中へお入りくださいませ。久美は、お待ちしております。夕餉も用意してございます」

数衛門は、久美がこの世のものではないことを既に悟っております。

——何故、この様に幸せそうな久美殿であるのだろうか。謂れなき理由で殺されたのではないか。僅かでも恨みがあれば、このような表情にはならないはず。

数衛門は相変わらず、ただ呆然と立ちすくんでいるだけでございました。

「オホホ、何をそのように不思議がって……。今、久美は、幸せでございますよ。さ、中にお入りくださいませ。お話をいたしませんか」

数衛門は考えました。所詮、理不尽なこの世の中。不条理にさえ思える出来事が起こっている。何が起こるか判らないのがこの世ではないか。たとえ、久美殿が、この世のものではないとしても、話を聞くだけであれば……。それに、この幸せそうな面持ちは余りにも美しすぎる。何故なのであらう。久美殿と、しばし過ごしても良いのではないだろうか。

数衛門は、この世とあの世の境目とも思える綺麗な障子の中に入ったのでございます。

傾きかけた家のはずでしたが、障子の中に入り、数衛門は驚いてしまったのでございます。

なんと綺麗な部屋であることか。これが、あの世なのであるうか。広い部屋。揺らめく蠟燭の炎。あの壊れかけた家は、何処に行ってしまったのでしょうか。

久美は、数衛門を暖かい湯気の立ち上る風呂へと導きました。

数衛門は垢だらけの体を洗い、月代を剃り、鬘を整えます。そして用意された着物を着たのでございます。着流しの姿は、以前の凛々しい数衛門そのものでございました。数衛門を見た久美は、ぼつと頬を赤らめたのでございます。

すっかり夕餉の膳が整った広い部屋。ひときわ明るく蠟燭が燈る部屋でございます。久美は、数衛門の手を引き、床の間の前にある席へと誘ったのでございます。

久美の他に人影はございません。海の幸、山の幸。夕餉は、数衛門が味わったことのないものばかりでございました。久しぶりのお酒に二人の話も弾みます。

「久美殿、つまらぬ噂とは言え、申し訳のない事態を招いてしまいました。お詫びしなければと思っております」

「何をおっしゃいますの数衛門様。世の中とはこのようなものでございます。自らの思いとは異なる方向に物事は向かうことがございます。その流れに抗うことはできません」

「……」

「……ましてや、好きなお方と一緒にされるなど、所詮、無理なことでございます。決めるのは家と家でございます。町人であればまだしも、武家

に生まれた者には、自分の意志などないのと同じでございます。

主計様と夫婦になりましたが、私にとりましては、お仕事と同じでございました。何の感情も抱きませんでした。

思うお方は心に秘めておりました。でも、私は嫁いってしまった身。そのお方とは、死ぬまでお逢いできないものと思っておりました。でも、久美は、それで良いと思っておりました。数衛門様は、都筑家のご次男。久美には兄上がおります。小さい頃から判っておりました。決して一緒にはなれないと……」

「久美殿」

久美は、初めて数衛門に自分の思いを伝えたのでございます。

「三年ほど前でございます。主計様が唐突に久美に聞きました。数衛門様と逢っているのかと。幼き頃、お会いしたのみ。もう何年もお会いしていませんとお答えいたしました。私は、何故、主計様が、そのような事をお尋ねになるのか判りませんでした。

後日、腰元に問うてみました。話を聞き、久美は驚いてしまいました。数衛門様と私のことが噂になっている。でも不思議でした。お逢いすることなどなかったのに、数衛門様と久美が噂になっている」

久美は、この時、恥じらいとも思える顔付きで俯いたのでございます。

「数衛門様、久美は、腰元の話聞き、嬉しゅうございました。本当に夢かと思うほど嬉しゅうございました。噂だけでも良い、数衛門様と一緒になれたのだと……。でも、これは自分勝手な喜びだと気が付きました。数衛門様にご迷惑が掛かっているのではと心が痛みました。

ところが腰元が言いますには、数衛門様には、いろいろなお話があることになるのに、全く耳をお貸しになられていないと。

久美は、もしかして数衛門様は……と考えてしまいました。そのように思った途端に、胸がときめいてしまいました。はしたない事とは思いましたが胸のときめきは治まりませんでした」

「久美殿」

「数衛門様、何もおっしゃらないでくださいませ。今はこうして二人きり。久美は、幸せでございます。久美が斬られたことを気になさっている

ようでございますね。久美が主計様を恨んでいるとお考えですか……」

久美は笑顔に戻り、明るい声で話を続けたのでございます。

「ホホホ、まったく逆でございますの。主計様が狂ったように久美にお聞きになるたびに、久美の喜びは大きくなっていったのでございます。」

主計様のお口から数衛門様のお名前が出るたびに、幸せを感じるようになりまして。それとともに、数衛門様にお逢いしたいとの思いも膨らんでまいりました。お逢いしたい、ただ一度だけでも良い、お逢いしたい。いえ、この世でなくとも良い、お逢いできるのであれば……。主計様に対しては、何の感情もございませんでした。久美を責める主計様を、嫌いになることもございませんでした。

ある夜、主計様は、刀を持って部屋に入ってこられました。久美は斬られると思いましたが、恐くはありませんでした。むしろこの世にお別れができる、ほっとした思いを抱きました。自ら命を絶つつもりはございませんでした。幼い頃から、流れに身を任せようと考えておりましたから。

数衛門様、今、久美は幸せです。さっ、もう少しお吞みくださいませ」

久しぶりのお酒が、二人を饒舌にいたします。

幼い頃、近くの小川で遊んだことや、野に咲く綺麗な花を手折ることなく、二人で見つめていたこと。蛇が蛙を呑み込むのを仕方がないね、蛙を助けたら蛇が困るしね、と手をつなぎながら眺めていたことなどを……。

久美と数衛門は幼き頃に帰り、語り合ったのでございます。語り合う二人の想い出は、一つとして違えること^{たが}はございませんでした。まるで昨日のことのよう。そして、数衛門は、今更ながら久美が自分と同じ考えを持っていることを知ったのでございます。

流れに身を任せ、在るがままの自分を受け入れる。

自分の刀も同じなのだろうか。親しき友とは言え、斬らざるを得ないのも流れの一つなのだろうか。

この夜、二人は、どちらからともなく求め合ったのでございます。そして、初めて寝屋を共にいたしました。

「お目覚めですか、数衛門様」

「あつ、久美殿、寝過ごしてしまったようです」

「あら、何かご予定でもおありなのですか」

「いや、何もありません」

「ホホホ、では寝過ごしたのではございませんね。寝過ごすとは何か、おやりになることが……」

「はっ？」

「あつ、申し訳ございません、女の私が……。数衛門様、此処では数衛門様のお好きになさってくださいまし。数衛門様のお屋敷として、心置きなくお振舞いくださいまし」

数衛門は、此処があのだ世であることを思い出しましたが、小さな声で

かたじけな
忝いといつぶやいたのでございます。

「数衛門様は、かなりお疲れの様子でした。今は、お顔も穏やか……」

「久美殿は、お休みにはならなかったのですか」

「数衛門様、そのようなことはお氣になさらないでくださいませ。久美は、この通り元気でございますよ」

頬をほんのり赤く染めた久美は、会話こそ弾みますが、数衛門の顔を見ることができません。昨夜の喜びが思い出され、顔を合わせるのが気恥ずかしいのでございます。

二人だけの暮らしが始まり、そして続いていったのでございます。

数衛門は、屋敷の中を歩いたことがございます。広くて長い廊下。何処まで続いているのか判らないほどでございます。部屋に入れば、天井には綺麗な絵が描かれております。部屋の襖を開けますと次の間が。そして、また次の間が……。書斎らしき部屋、何十畳もの大広間。総ての部屋には

蝋燭が燈り、壁や柱は、落ち着いた光を放っております。しかし、人に会うことはございません。

いくら歩き廻っても廊下や部屋が続きます。切りがございません。

数衛門は久美に聞いたことがございます。

「久美殿、外で見たときには小さな家でしたが、中は随分と広いのですね」

「まあ、お歩きになったのですか。おほほ、このお屋敷は、何処までも続いておりますのよ。それこそ何処までも……。入り口は、あの障子のお部屋だけです」

「久美殿にお会いした部屋ですね」

「ええ、あのお部屋だけ……」

この屋敷には、大きな広い中庭がございます。中庭は、常に春の陽気。中庭を見れば、朝、昼、夜と一日が過ぎていくのを知ることが出来ますが、夜になっても真つ暗になることはございません。何処からともなく柔らかな光が差し込んでまいります。そして、桜や椿、木蓮が咲いております。大きな池の周りには菖蒲や杜若。池には、桃色の花をつけた睡蓮がそよ風に揺れております。

椿が、春に咲くことはありません。

「数衛門様、このお庭は不思議なんですよ。久美が好きな花たちが、いつも綺麗に咲いてくれます。散ったりいたしません」

数衛門は、蝶や小鳥、魚などを搜してみましたが、いくら搜しても見つけることはできなかったでございます。

暖かな中庭を二人で語り合いながら散歩をすることもございました。話はいつも幼き頃の想い出。そして、今、幸せであること……。その間に起こったことは、二人の記憶からは、すでに消え去ったのでございましょうか。

数衛門は、何年が過ぎたのか、すでに判らなくなっております。

ふと思ひ出したように、数衛門は障子の外に出てみる場合がございます。中庭は、春の陽気でございますが、外はいつも冬の夜。枯れた薄が続き、寒空に三日月とたくさんの星が小さく煌いております。そして、冷たい風がヒューヒューと薄を揺り動かしております。

「久美殿、外を歩いてみませか。薄の穂が風に揺れ、なかなか風情がありますよ」

「数衛門様、私は寒さが苦手でございます。それに久美は、外には……」
久美は、顔をそむけ部屋の奥へと行ってしまうのでございます。

「久美殿、今日の夕餉は数衛門がお作りいたそう。いつも久美殿では申し訳がない」

数衛門は、久美を氣遣つてこのように申したのでございます。

しかし、この日、久美の表情は何故か強張っております。数衛門が、この様な久美の寂しげな顔を見るのは初めてのことでございました。

「数衛門様は、何故、久美と呼んでくだらないのでしょうか。二人は

めおと
夫婦ではないのですか。お願いでございます。どうか久美と呼んでくださいまし」

数衛門は、夫婦との言葉を聞きますと、下を向いたまま何も言わずに奥へと行ってしまいます。数衛門は、どんなに久美との暮らしが楽しいものであつても、久美があの子の者であることが、頭から離れないのでございます。

数日後、数衛門は、久し振りに薄が原を歩いてみたくなったのでございます。

障子を開け、外に出ようといたしました。どうしたのでございましょう、数衛門は、障子の外に出ることができません。金縛りにあつたように体が動かないのでございます。

——外に出られない。と、いうことは……
数衛門は、悟ったのでございます。

「久美っ、久美っ。久美、こちらに来てくれぬかつ！」
久美は、数衛門の大声に驚き、飛んでまいりました。

「数衛門様、今っ、今、久美とお呼びになりました。久美と……」
「いかにも。久美。二人は晴れて夫婦ぞっ。拙者は、これからも久美を大切にいたす。二人に降り掛かる、どのような小さな火の粉でも私は許さん。二人はいつまでも一緒ぞっ！」

何年が過ぎ去ったのでございましょうか、この薄が原に、大きな看板を立てられたのでございます。

「ススキ野宅地造成地 来春発売開始 横田建設」

ブルドーザーが、うなりを上げ、土を掘り起こしております。この辺り
一帯は、あの横田主計の末裔が所有しております。十数年前までは、誰も
見

向きをしなかった薄が原でございましたが、近くに鉄道が通り、一躍脚光
をあびだしたのでございます。

ある日、現場監督が、掘り起こした土の中に一体の人骨を見つけたので
ございます。

早速、社長の横田に連絡いたしました。

「社長、人骨ができました。警察に連絡しましょう」

「ちょっと待て。どんな骨だ」

「見た目は、がっしりとした骨です。多分、男でしょう。しかし、かなり

古いようです。強く掴むとボロボロと欠けていきます」

「そうか。古いのか。構わん、粉々に砕いて土に混ぜてしまえば判らんだろう」

「しかし、社長。それでは……」

「構わんと言っているだろう。どうせ、何百年か前に行き倒れた者の骨だ。言う通りにしろっ」

人骨が掘り起こされた場合、警察に連絡しなければなりません。横田は、調査などで工事が遅れるのを懸念したのでございます。

現場監督は、骨を砕きました。流石に気が咎めるのか、酒を掛け、仕方なく土に戻したのでございます。そして、線香をたてて手を合わせました。

閑静な高級住宅街ができました。贅を凝らした邸宅が連なっております。どの邸宅の庭にも薄が植えてあり、秋になりますと綺麗な穂が風に揺れるのでございます。

横田も、この高級住宅街に邸宅を構えたのでございます。ひときわ目立つ大邸宅は、まるでこの一帯の支配者であるかのような威容な姿を誇っております。人骨を砕き捨て去ったことなど、すっかり忘れておりました。

ある日のことでございます。

なかなか部屋から出てこない横田を不審に思い、女中がドアをノックいたしました。答えがありません。ドアには鍵がかかっております。急いで横田の妻に知らせたのでございます。部屋の中を見た妻は、その場で氣を失ってしまいました。余りにも凄惨なものを見てしまったのでございます。

部屋には、左の首筋から右の腰まで、袈裟懸けに両断された横田の死体が転がっていたのでございます。

どんな些細な火の粉でも降り掛かってくれば、容赦はしない。

まさか、あの数衛門が……

都筑は、『薄が原』を書き終わった。

相澤から聞いた話をベースにしているが、ほとんどが創作である。徹夜になってしまった。都筑は、書いている時に、久美が側に居るように思っていた。久美に語り掛けながら薄が原を書いた。

—— 噂だけでも嬉しいものなのか。やはり生きている間に数衛門に会いたかったんじゃないの。

—— 久美、主計が刀を持って部屋に入って来た時だけど、本当に怖くなかった？

—— 数衛門は、なかなか久美と呼んでくれなかったけど寂しかっただろうね。

久美が微笑を浮かべて、頷いたように思った。

—— 久美、数衛門と一緒に良かったね。今、二人は幸せだ。いやこれからも、ずっと幸せだ。良かったな、久美。

久美は顔を曇らせたが、都筑は原稿に目を遣っていた。

—— 現場監督は、横田の命令で数衛門の骨を砕いたけど……。ちょっと可哀想だったかな。でもお線香を手向けたんだから良いよね。

久美は頭を横に振り、口を開けて必死になって何かを話した。だが、その声は何故か、都筑の耳には届かなかった。そして、久美の目からは大粒の涙がこぼれた。

この時も都筑は、原稿に目を落とし、懸命に文字を綴っていた。

都筑は、小説を書くとき必ず手作り本にしていた。見様見真似であるが、A5サイズの手紙にプリントアウトし、背中にカッターナイフでギザギザの切り込みを入れる。そこに木工ボンドをたっぷり塗って、色のついた表紙をつける。このようにすれば、文庫本のような体裁の本が出来上がる。都筑は、薄が原を何冊かの本にした。

嬉しい事に都筑の作品を待っている友人が何人かいた。都筑は彼らに薄が原を送った。

数日後、都筑は通勤途中の地下鉄の中で相澤老人を見かけた。今度は、都筑が声を掛けてブラットフォームのベンチに誘った。

相澤は嬉しそうな顔をして話し出した。

「都筑さん、お会いできて良かった。先日の話の折、大切なことを言い忘れましてな」

「相澤さん、お話の前に私の話を聞いてください。実は、お聞きした久美と数衛門の話ですが、小説に仕立てました」

「そ、そうですか。しかし……まだ、人には見せていませんよね」

「いえ、作品を待っていてくれる友人がいますので、手作り本にして何人かに送りましたが」

「えっ！」

相澤は、確かに、えっと驚きの声をあげた。そして急に顔を曇らせた。だが、都筑は気付かなかった。

「ところで……相澤さんは長生きしていますよね。と言うことは、いろいろな話をご存知のはず。お願いですから話していただけませんか。参考にしたいんです」

「……」

「この前、一夜城の話や朝鮮に渡った話をしてくれましたよね。それに関が原の合戦で平四郎と戦った話し……。いや、それよりも相澤さん自身の話の方が面白いかも知れません。お願いですから、もう少し詳しく聞かせてくれませんか」

都筑は、あれほど相澤のことをボケ老人とか狂っているとか思っていたくせに、今は、そのようには考えていなかった。

相澤は、都筑の話を聞いていないようだ。肩を落とし、萎んで見えた。顔にはいいようなない恐れ表情があった。

——総てを話さなかった自分がいけなかった。取り返しの付かないことを……

「そうですね、いずれ機会があったら……」

「ところで何か言い忘れたことがあるとおっしゃってましたが、何です

か」

「もう宜しいのです」

相澤は、こう言うのと、ふらーっと立ち上がり歩き出した。

「相澤さん」

都筑は声を掛けたが、相澤は乗降客に紛れて掻き消すように見えなくなつてしまつた。

「なんだか最近の都筑さんで楽しそう。お仕事も順調なんですよ」

都筑が出社すると、相も変わらず夕子は話し掛けてくる。夕子は最近、立ち話をする時には体を近づけてくるようになっていた。しかも顔を近づけ、如何にも二人きりの話をしているような雰囲気を出そうとする。この日もそうであつた。都筑は、何となく身を引いてしまう。

「いつもと変わらないよ」

「あら、そうかしら。もう、地下鉄での観察とか妄想の話もしないし。そういうえば先週だったかしら、二、三日、ボーツとしてたことがあつたけど。それに、徹夜明けのような顔をしてた日もあつたわ。でも、最近は活き活きしている」

都筑は、会社の連中に小説を書いていることを話していない。

「ま、褒められていると思えば嬉しいけど、本当に何も無いんだ」

「恋人が出来たんじゃないかって噂する人もいるわよ。口の悪い人なんか老いるくの恋だなんて言つてたわ。都筑さんは、まだ四十歳ちよつとでしょ。老いらくなんて失礼よね」

「老いらくか。参つたな。自慢する訳じゃないけど、恋人なんかいないよ。噂話は外れだね」

小島夕子は胸が大きく、社内でもグラマーな女性と評判であつた。顔付きは十人並みだがスタイルが良い。どこにいても男の目を引くタイプである。何人かの男性社員が興味を示しているが、夕子は余り気にしていない様子である。浮いた話もないが、社内では都筑に興味を持っているとの噂が広まりだしていた。

夕子は、短大を卒業し、父親の紹介でこの会社に入った。別に、行儀などにはうるさい両親ではなかったが、短大は中学から続く女子校だった。学生時代は同級生と過ごすことが多く、周りは女性ばかり。男性との付き合いは経験していないし、あまり意識もしていなかった。

ところが卒業し、社会に出てからの夕子の環境はガラッと変わった。服装は、普通の会社員と同じようにブラウスにタイトスカートが多い。このシンプルな格好が、夕子のスタイルの良さや胸の大きさを引き立てたのだ。だが本人は、そのことに気付いていない。

二十歳になった夕子は、人目を引く存在であった。そのためか、町を歩いていると声を掛けてくる男も多かったが、何故なんだろうと思うだけだった。夕子は、男と女に関しては、全くの晩生おくでであった。

社内でも目立っていた。同期の男性社員だけでなく、先輩や上司などから日替わりで飲み会に誘われた。何人かで出掛けると、男性社員は夕子の側に座りたがった。上司などは、社会人になったばかりだし、いろいろと世の中について教えて上げなければならぬ、などと言って隣に座らせた。他の女性社員は面白くなかったが、夕子は、別段鼻にかける様子もなかった。ため妬まれたりすることはなかった。

入社当時は、グループでの飲み会が多かったが、数ヶ月も経つと個別に誘われることが多くなった。夕子は、彼らに対して男を意識することはなかった。単なる友達だと思っていた。そのためか気軽に二人で飲みに行ったりもした。

ところが、夕子は妙なことに気が付きだしていた。楽しく飲み、話をするが、相手はチラチラと自分の胸を見るのである。酒が進むと話はそつちのけで、胸ばかりを見るようになる。夕子は、男とはそのようなものかと思ひ始めていた。

ある社員と飲んだ時のことだ。この社員とは一緒に仕事をする機会が多かった。仕事の合間には気楽に話をした。この社員との雑談は、明るくて飽きることはなかった。

この日も映画や音楽など、楽しい会話が続いた。そのためか遅くまで飲

んでしまった。その社員が家まで送ると言う。夕子は断ったが、何かあつてはいけないと、半ば強引に送ってもらうことになった。最寄り駅から家に向かう途中、その社員は何と胸に触ろうとした。夕子は、腕を振り解いて家まで走って帰った。飲みすぎていたのであれば、まだ許せると思ったが、その社員は大して酔ってはいなかった。翌日、この社員は屋上に夕子を呼び出し、平謝りに謝った。この態度にも幻滅を感じた。

もっと酷い社員もいた。以前から飲みに行こうと誘われていたのだが機会がなかった。ある日、たまたま帰りが一緒になった。駅まで歩いたが飲みに行こうと誘う。別に予定もない。夕子は付き合うことにした。この社員と飲みに行くのは初めだった。九時頃、そろそろ帰りますと夕子は言った。店を出た途端、その社員は、夕子の胸に触れるようにピタッと寄り添い、耳打ちした。ホテルに行こう。そして体を抱こうとした。夕子は、この社員のあからさまな態度に驚き、跳ね除けた。そして失礼しますと大声で叫び、駅の改札口を通った。

翌日、この社員も夕子を屋上に呼び出してこう言った。このことを他人に話したりしたら、承知しないぞ。もし、そんなこととしてみる。君に誘われてホテルに行つたと話すからな。まるで脅しであった。

この様なことが何回か起こった。

皆、謝った後で人事部長には絶対に内緒にしてくれと言った。夕子は、人事部所属で良かったと思つたほどだ。

入社して一年が過ぎた頃、短大のクラス会が開かれた。夕子はこの席で親しい友人に日頃のことを話してみた。

「夕子、今頃何言ってるのよ。貴方は女から見ても惚れ惚れするほど、魅力的な肉体を持っているのよ。羨ましいいくでしょうがないわ」

「羨ましい？」

「そうよ。夕子と一緒にプールに行くの嫌だったわ。周りの男性は、みんな夕子ばかり見るんだもの。あたしなんか誰も見てくれなかったわ」

「……」

「旅行に行ったじゃない。よく温泉に入ったわよね。皆、言ってたわよ。」

夕子の体って凄いつて。自分で相手を捜さなくたって男が寄ってくるって」

この話を聞き、夕子は、今までのことが判るような気がした。しかし、男の目を引く体とか女だとか、いくら羨ましがられても夕子は嬉しくはなかった。

その後も夕子は、男から誘われることが多かった。飲みに行ったりドライブをした男性も何人かいた。彼らに対する印象は良かったし好感を持っていた。彼らは、何度目かのデートで必ずといって良いほど体を求めてきた。夕子は、男と女はそういうものと判ってきていたが、ときめきなどは感じなかった。それに、一度たりとも体が熱くなることはなかった。

夕子は、三十歳を過ぎていた。

幾つかの縁談もあり、夕子は、何度かお見合いをした。それらのお見合いの後、先方は、是非と言ってきた。両親も勧めたが、夕子は全く相手に興味を示さなかった。親と言いつ争うこともあった。だが、親とは言え、本人が嫌だと言う相手を無理に押し付けることもできなかった。

最近、親は結婚しろと言わなくなっていた。夕子には焦る気持ちにはなかった。いずれ、ときめきを与えてくれる男が現れると思っていた。

夕子が初めて都筑に会ったのは三年前であった。入社時から人事部所属の夕子は、この頃、人事スタッフとしてベテランの部類に入っていた。

会社が中途社員の募集をした。夕子は事務面を担当したが、都筑が応募してきたのだ。夕子の仕事は、履歴書など応募書類の整理と条件に合う応募者の一次選考であった。該当者が決まると面接日と連絡するが、これも夕子の仕事であった。二次選考は採用係が中心になり行なう。

夕子は、書類を見た時も、また電話連絡を入れた時も都筑に対し、特別な印象は持たなかった。

面接には夕子も同席する。選考に関する質問事項などは予め用意されている。夕子は面接担当者と応募者との遣り取りを記述する書記のような仕事を

在り来たりの面接が続いた。

都筑の番がきた。夕子は、既に書類選考の時に履歴書に添付された都筑の写真を見ているが、再度、写真を確認した。真面目なサラリーマンの感じだ。

失礼します、と都筑が面接室に入ってきた。夕子は、顔を上げて都筑を見た。写真で受けた印象よりは若く見える。書記とはいえ、応募者の一挙一動をジックリ見なければならぬ。入り口から部屋の中央に置かれている椅子まで歩く様子、受け答えの態度などを見るのだ。

都筑が椅子の横に立ち、頭を下げた。

「どうぞお座りください」

担当者が面接を始めた。

「都筑さんですね。まず、この会社に応募した理由をお聞かせください」

質問項目の順に面接が進んでいった。夕子は、担当者が話している間は都筑を見た。そして都筑が話し出すと、その内容を記述した。都筑を見たリ記述したり……。夕子は、この動作を繰り返した。

都筑は、担当者の顔を見ながら答えていたが、チラッと夕子の方に顔を向けた。一瞬、都筑と目が合った。夕子は、ドキッとした。その時、不思議な感覚に襲われた。どうした訳か、体の中に熱いものが流れたのだ。それは初めて経験する感覚だった。遣り取りを記述する手が震えてきた。

都筑の声は耳を通り、体の芯をつつくように届いていく。その度に夕子の体の中に熱いものが満ちていった。面接は型通りに進んでいるが、夕子は早く終ってほしいと思った。もう、この場に居たくない。どうしたんだろう、私は。訳が判らなかった。

都筑が、では宜しくお願いますと椅子から立ち上がった。

「都筑さん、可否については追って小島の方から連絡を入れさせていただきます。今日は、ご苦勞さまでした」

都筑が夕子の方に顔を向け、頭を下げた。その時、夕子と都筑の目が合

った。夕子は、またズキンと衝撃のようなものを受けた。そして、体の芯に痛みを伴った疼きのようなものを感じた。

夕子は、合格の連絡を入れなければならなかった。電話を持つ手が震えた。周りの連中は、誰も気付いていないようだったが、努めて平静を保とうとした。

入社手続きの説明は、夕子の役割だった。給料などの説明もあるため、小会議室を使うことになっている。

夕子は、都筑と二人きりの部屋で説明をした。向かい合っていると、次第に体温が上がっていくのが判った。体の芯は疼きつばなしかった。自分は、どうなってしまったのだろうか。都筑に気付かれたりしないだろうか。不安が過ぎつつが、都筑は笑顔のままで説明を聞いている。

「都筑さん、これで説明は終わりです。人事面だけでなく何でも構いません。何か判らないことがあったら、いつでも気軽に聞きに来てください」
「小島夕子さんでしたね。これからも宜しくお願いします」

夕子は、都筑が入社してから落ち着かない毎日が続いていた。
都筑は、あの説明で総ての書類をまとめ提出している。どこかにミスでもと搜したが、書類は完璧だった。

一ヶ月ほどが経ったが、都筑は何も言ってこない。他の人とは違う。私に興味を持っていないのだろうか。夕子は、男の誘い方を知らなかった。じっとしていれば男の方から声を掛けてきたからだ。どうすれば良いのだろう。

夕子は、短大の同級生、幹子に相談してみた。

「まー、夕子に好きな人ができたの。お祝いしなくちゃね」

幹子は結婚し、二人の子供がいる。経済的にも安定した毎日を送っているためか、心配事もなく、会話にも遠慮がない。独身女性が聞けば顔を赤くするようなことも平気で言うようになっていた。

「相手の人って、もう四十歳を過ぎているでしょ。普通の男だったら、夕子の体を見れば絶対に興味を持つはずよ。変ね。夕子、ひよっとして、その人、アッチ系じゃないの」

「アッチ系？」

「ホモ」

「止めてよ。真面目なんだから」

「そうね。まー、アッチ系かどうかは、いずれ判ることだし……。どうすれば興味を持たせられるか。これが夕子の相談ね。ねー、夕子は人事部なんでしょ。と言うことは、社員への気配りも仕事の一つよね。四十を過ぎてるって言っても、その人は新入社員。毎朝、声を掛けてあげるのも人事の仕事じゃない。まず、自分の存在を相手にキチンと認識させる。男と女には、これが大切ね」

「周りから変に思われないかしら」

「何言ってるのよ。人事部所属なんだから問題ないわよ。その人、そのうちに涎流してお尻を追っかけてくるって。でも焦らないことね。夕子は、初心なんだから」

「判ったわ。声を掛けてみる」

「そうしなさいよ。そのうちに飲みに行こうって誘われるわよ。二、三回、お酒でも飲めば、親しくなっていくし……。それからアッチの方に誘われたら絶対に受けるのよ。そしてねえ、裸よ、裸。裸見せちゃえば、ヘロヘロになるって。恋だ愛だなんて綺麗なことを言ったってねー、所詮、男と女はアレよ」

「アレって？」

「何言ってるのよ。気持ちがいいことよ。いくら私だって、モロに言いたくはないわ」

幹子は、学生時代、キスと聞いただけで顔を赤くしていた。夕子は、人は変わるものだと思いに駆られた。

男とはそういうものだとは判っている。でも都筑に対し、そのような態度で接するなど自分には無理なのではないかと思った。

次の朝、夕子は、普段、口にしたことがないことを思い切って話してみようと思った。幹子から聞いたことだ。

「都筑さん、私、気になるんだけど」

「今度は何ですか」

「女性社員が、都筑さんで格好良いのに何で結婚しないのかしらって……。給湯室で話しているのを聞いたんだけど……。そしたら、その人たちの一人が、右手を左の頬に持っていたの」

「何だい、それは」

「ホモ」

「ホモッ！ それは失礼だな。男同士だなんて考えただけでも気持ち悪いよ。それに女同士ってのも気持ち悪い。一人で居るからって、ホモとはね。気分悪くなるな」

夕子は、都筑の顔を見た。本当に気分を悪くしたようだ。このような話をすれば、じゃー一度試してみるかいとでも言ってくれるのではと思っていたのだ。夕子は焦った。

「そう言えば、君もまだ一人だね。じゃー君ってレズかい」

開き直った訳ではないが、夕子は努めて平静に話そうとした。

「まー、やり返している。でも、何で結婚しないの」

「縁だよ、縁。君だって同じだろ」

「確かに縁だとは思うけど……そうね。縁ね。今までは感じる人に出会わなかったし」

「いずれ出会えるさ」

「明るい都筑さんの方が私は好き。また眉間に皺なんて止してくださいね」

「大丈夫だよ」

都筑は、デスクに行こうとした。後ろから夕子の声がした。

「都筑さん、あの……今度、お酒でも……」

都筑は、黙ってデスクに向かった。

都筑は、夕子が話し掛けてくれば、普通に受け答えをするが、特別な感情など全く抱いていなかった。

その週の土曜日。

都筑は休みの日も早起きだ。この日も早くに起き、ベランダの植木鉢に水遣りをした。都筑は、マグカップに牛乳を入れてレンジに置いた。時間は二分十秒。牛乳の膜ができずに、ちょうど良い熱さになる。砂糖をスプーンに半分。コロンビア産のインスタント・コーヒーをスプーンに二杯。このコーヒーマイルクを飲みながら新聞を読むのが毎朝の日課だ。

電話が鳴った。都筑は驚いた。何だろう。こんな朝早くに電話が鳴ることなどない。急いでカップをテーブルに置き、受話器をとった。

「もしもし、神谷^{かみや}さんですか？」

—— 神谷？ あつ、そうか、

神谷とは都筑のペンネームである。

「はい、神谷ですが……」

「良かった。実は、神谷さんが書いた『薄が原』ですが、映画にしたいんです。宜しいですか」

—— 映画？

「あの一、どう言うことですか」

「東山さん……神谷さんの友人ですよ。実は、先日、東山さんの所に遊びにいったんですが、その時にこんなのあるけど、と神谷さんの本を渡されたんです。酒を呑んでいましたので気軽に預かっちゃいまして……。でも、次の日に読んだんです。そしたら、この小説、結構面白いんです。昨夜、脚色してみたんですが……見ていただけませんか」

「今日は土曜日ですので家におりますが」

「そうですか。良かった。じゃー、これからお邪魔して良いですか」

「えっ！ そうですね、これと言って用事ありませんので」

「良かった。実は、お宅のそばで携帯してるんです。今からお邪魔します」

電話は切れた。どうやら『薄が原』が東山の手を経て、ある映画監督の目に留まったようだ。東山は、前の会社で神谷と一緒に仕事をした仲間でありプロのコピーライターだ。何か感想でも貰えるかもしれないと本を送っていたのだった。

都筑は電話の後も、ハッキリと状況を理解することができなかった。電話の相手が誰であるかも判らないし、初めて話をした相手である。これからお邪魔するといっていた。

——来るったって、今、朝の六時半。結構、自分勝手な人だね。それに名前も聞いてない。そばまで来てる？　じゃー、すぐ来るんだ。

玄関のチャイムが鳴った。

「さっき電話した栗原です」

「わ、判りました。すぐ行きます」

都筑は、玄関の扉を開いた。玄関の前には目を真つ赤にした男が立っていた。しかも、無精髭。これが映画を作る人なのか。どうも見栄えは余り良くない。

「どうぞ」

栗原が入ってきた。都筑は、居間に栗原を招いた。

「済みません。お休みのところ。これが脚本です。最近、漢字を読めない人が増えましたので題名を『すすきが原』に変えました。読んでくれますか」

「えっ、えー」

「済みませんが徹夜でしたので……　神谷さんが読んでる間、ちよつと眠らせてください」

栗原は、脚本を手渡すなり横になった。初対面でありながら用件を伝え、た途端、まるで旧知の家にいるようにグーグーといびきをかき始めた。都筑は図々しい人だと思ったが何か憎めないものを感じた。

都筑は、今まで脚本など読んだことはなかった。脚本を読み始めたが、普通の本とは違う。読み難いのだ。五、六ページ読んだ段階で柱やト書き、台詞など、脚本を読む要領が判った。都筑は、最初から読み直した。栗原の脚本は素晴らしい出来栄であった。都筑は、すっかり栗原のすきが原に溶け込んでしまった。

都筑は、小説を書き終えると推敲を兼ねる。自分で作り出した登場人物でありながら、読み返すうちに、まるで実在の人物のような錯覚に陥ることがある。特に登場する女性には、愛しさすら感じてしまうことがあった。特に薄が原の久美は特別な存在である。今も側に居るような感じがする。

栗原の捉え方が良ったのか、『すきが原』の久美も素晴らしかった。

薄が原には、いくつかのハイライト部分がある。

- ・出だしの薄が原の情景、真つ白な障子、障子に映る影
- ・数衛門が友であるはずの討手たちを、無表情で斬ってしまう自分を理解できずに苦悩する場面
- ・三つ指をついた久美が、そつと顔を上げた瞬間
- ・数衛門が金縛りに合い、自分があの世の人間になったことを悟り、久美つ、と叫ぶ場面

この監督は、実に良く脚色している。こう言う人をプロというのだろうか……。

「栗原さん、栗原さん。起きてください」

栗原が、ムニョムニョ言いながら目を覚ました。

「あつ、そうか。で、どうでした」

「面白いですね。面白い。なんだか自分で書いた物語ではないような感じ
です。映像として見てみたいですね」

「そうですね。どんなところが気に入りました」

「久美の描き方です。それに、数衛門が久美と叫ぶまで後姿と横顔くらい
しか見せず、叫ぶ瞬間にその表情を大写しするなんて良く考えましたね。

しかも、他の場面では照明を横か後ろから当てて顔を暗くする。でも、役
者さんは、演技が大変でしょうね。気になるのは最後の場面です。横田の
両断された死体はどうするんですか」

「任せてください。それよりも映画化についてはOKですか」

「えー、初めてのことでよく判りませんが、栗原さんの好きにして結構で
すよ」

栗原は、これからスポンサー捜し、資金調達、出演者選びなどを始める
こと、都筑との契約の件、それに関わる契約金の金額などを説明した。

「契約金など要りませんよ。手慰みで書いたものですし。それに神谷なん
て名前が画面に出たって、誰も判りませんよ。私は、本も出したことがな
いド素人ですから。映画の格を下げるだけでしょう」

「本当に神谷さんは、こういうことが初めてなんですね。でしたら余計な
ことを考えず、私に任せてください。契約金の件も含め、総てキッチンと遣
らなければなりません」

「そうですね。判りました。では、栗原さん宜しく願います」

「ところで神谷さん、久美のモデルになった人はいるんですか」

「えっ、居ませんよ、そんな人！ 私が勝手に作りあげただけです」

「じゃー、神谷さんの理想の女性なんですね」

「理想の女性？ 栗原さん、そんなことを聞いてどうするんですか」

「いや、済みません。モデルになった人が居れば俳優を決める時の参考に
しようと思ったものですから。あつ、それから、どなたかに編集を頼みま
したか」

「いえ、筋立てから書き終わるまで、すべて私一人で作りましたけど」
都筑は、相澤のことが頭に浮かんだが、口には出さなかった。

「そうですか、神谷さん一人でお作りになったんですか。何だか誰かの影というか……ま、良いでしょう」

栗原の言い様に何か釈然としないものが残ったが、都筑は敢えて訊かなかった。

栗原は、出演者選考やハイライト場面の撮影には立ち合ってくれと都筑に頼み、そそくさと帰っていった。

都筑は、嵐が去った後のような感じを受けていた。今は静けさの中にいる。

——自分の作品が映画になる。世の中、何が起こるか判らないな。なるようにしかならないと思っていたが、これも何かの流れなのか。こんなこともあるんだ。ま、栗原監督に任せておけば、自分の映画を見ることができ。それも面白い。

脚本を読んだことも映画監督と話すことも初めてであり、都筑は疲れを感じていた。昼寝でもと思ったが、栗原が言った幾つかの言葉が気になっていた。

——久美のモデル……。何がモデルだ。

都筑の胸に、どうした訳か怒りのようなものが湧き上がってきた。

——久美のような女がこの世にいる訳がないじゃないか。昔ならともかく、こんな礼儀も何もない今の世の中に、久美のような女が居る訳がない。今は、おかしいよ。車内で女が化粧をする時代だ。何事にも自由であることは良いけど、今の人間は自由を履き違えている。結婚もそうだ。昔のように家と家が決めるのは確かにおかしい。本人同士が決める方が良いに決まっている。しかし、好きになったからと、すぐに結婚し、嫌になれば、これまた、すぐに離婚してしまう。今の若者たちには節操も何もないではないか。久美は、幼い頃から教衛門が好きだった。大人になり二人が会えなくとも教衛門を慕っていた。死んだ後も……。そんな女が、今の世に居る訳がない。

相澤から聞いた久美や数衛門は、何百年か前には実在していたはずだ。だが、薄が原に登場する久美や数衛門は、都筑が作り上げた人物である。確かに久美は、都筑の前に現れてくれた。しかし、その久美は実在する人間ではない。薄が原と自分の中だけに存在するのだ。所詮、映画などは虚の世界でしかないはず。久美を演じることができる女優が、いるかどうかは判らない。薄が原がどのように映像化されるのか。これには興味がある。しかし、登場する久美は、久美のような久美であるが、久美ではない。

都筑が映画館に行ったのは子供の頃である。最近は滅多に行っていない。映画といえば、たまにテレビで放映されるものを見るくらいであった。栗原のことなど全く知らなかった。ネットで調べてみると、今までに三本の作品を発表した新進の監督であることが判った。レンタルビデオ店に行つて搜したが、一本だけビデオ化されていた。悲恋を描いた時代物であった。

借りてきたビデオを見た。

静かに流れていく画面は、透明感を持っていた。ほんの微かにうつすらと薄紫色の靄がかかったようで、とても品が良く、幽玄な雰囲気を感じさせている。

登場人物の描き方は、全体の雰囲気にもマッチしたもので、糸が、すーつと、そして、ゆらゆらと流れていくような感じで表現されていた。そして、おぼろげな感じだった糸が、次第にハッキリとした赤と紫の二本の糸へと変わり、それが静かにゆるやかに流れ、絡み合つていく。そんな感じであった。

都筑は、この映画に薄が原を重ね合わせてみた。栗原が、何故、映画化したくなったのかが判るような気がした。映像的に見れば薄が原は、確かに栗原の世界であった。よくも栗原の目に止まったものだと思ふに駆られていた。

栗原からの連絡が待ち遠しかったが、都筑は普段通りに会社に行き、仕事をしていた。

夕子は、ますます親しげに近寄ってきていた。あからさまな態度や話をする訳ではないが、誰が見ても好意を示しているように感じる仕草である。周りの者たちは、二人が付き合いだすのは時間の問題だと思っているようだ。小島さんのこと、どう思っているのなどと、それとなく聞いてくる女性社員もいた。こうなると都筑は、煩わしくなってしまう。

栗原が訪れてから三週間が経った。この日、栗原から電話があつた。

「神谷さん、スポンサーが付きましたよ。結構奮発してくれました。どこだと思えます」

「そんなこと判りませんよ！」

「あつ、はっはー、そりやそうですね。実は、製紙会社なんですよ。一時、日本家屋が敬遠され、洋風建築が流行りましたよね。ところが、また和風が見直されだしているそうなんです。日本家屋だけでなく、洋風建築の中に日本間を作ったりするのが流行りそうなんですって。今度の作品では、障子が大きな意味を持っていますよね。それに嬉しいことに、この会社の社長が、私の作品、特に日本間の画き方を気に入っているそうなんです。条件は障子の美しさをトコトン画けです。私もそのつもりですので問題はありません。この製紙会社だけで資金はOKです」

栗原の話は続いた。

「それから今度の土曜日ですが、久美のオーディションがありますので立ち会ってください。場所は、霞スタジオです」

相手の予定など全く無視した電話である。

「わ、判りました。ところで霞スタジオって？」

「いやー、面白い名前でしょ。正式には麻布スタジオって言んですが、貧乏監督たちが使うスタジオなんです。皆、金がないからいつも腹を減らしている。まるで霞を食ってるようだってんで、こんな名前で呼ばれてるんですよ」

「違いますよ、場所ですよ！」

オーディションの当日、都筑は、朝から落ち着かなかった。オーディションは、午後三時からだ。どんな格好で行けばよいのか、行ってから何をすれば良いのか、まるで自分がオーディションを受けるような気持ちであった。

電車を乗り継ぎ、霞スタジオに向かった。麻布など減多に来ることはない。栗原に聞いた道筋を思い出しながらスタジオを搜したが、意外と簡単に見つけることが出来た。

門は御影石で出来ていた。実に立派な門構えだが守衛はいない。都筑は、中に入った。敷地はかなり広く、倉庫のような三棟の建物があった。確かに霞スタジオの名前に恥じない、くすんだボロボロな建物。壁は、蔦に覆われていた。蔦の絡まる建物といえ、しつとりとした情緒を醸しだすものだが、むしろ物悲しさを感じてしまう。モルタル造りのようだが、所々にヒビが入っている。それに、モルタルが剥げ落ちて金網のようなものが見えている。こんなところで、あの幽玄な雰囲気をもつ栗原作品が生ま出されているのかと思うと、虚の世界の不思議さを感じてしまう。

ふと見ると普通の建物があつた。どうやらこれが事務所らしい。オーディションは此処で行なわれるようだ。

建物の入り口にスタッフが立っていた。これがまた霞男を絵に描いたような雰囲気の人だった。長髪はボサボサで無精髭。ヒョロヒョロの長身。ヨレヨレのジーンズだが、所々に穴が開いている。

「神谷です」

「あつ、神谷先生ですか、監督がお待ちかねです、どうぞ」

—— 先生？ 何言ってるんだろ、この男は。

外観は古びていたが、オーディション会場は、板張りの床で掃除が行き届き、綺麗で清潔な感じであった。都筑は、試験会場のような雰囲気を想

像していたが、別に机などは置いてなかった。

栗原は、デッキチェアのような椅子に座って足を組んでいた。都筑を見つけると、さつと立ち上がり、先生どうぞと隣の椅子を指した。

「栗原さん、その先生って言うの、止めてくれませんか。私は大嫌いなんです。そう呼ばれている人間に碌な奴はいない。絶対に止めてください」

「神谷さん、これがしきたりなんですけど……」

「しきたりもクソもない。嫌なものはイヤなんです。神谷と呼ぶようにしてください」

栗原は、扱いにくい人だなと思った。しかし、余りにも都筑が真剣な顔で言うのを見て大声でスタッフ達に伝えた。

「神谷先生を、これからは神谷さんと呼ぶように。いいね」

何となくスタジオ内に苦笑が洩れたようであった。だが、都筑は気にしなかった。

栗原によると、数衛門は木下隆に決定していると言う。都筑も知っている名前であり、今、女性ファンを虜にしている俳優である。栗原も結構やるな。都筑は感心した。また、蓮見一郎が、横田主計と横田社長役を一人二役で演ずるそうだ。

オーディションを受ける女優は三人だと言う。名前を聞いたが、皆、知らない女優ばかりであった。栗原は、三人には既に台本を渡してあり、ある場面の台詞を覚えてくるように伝えてあると言った。

一人目が入ってきた。

「浅川です。栗原監督、神谷先生、今日は、よろしくお願いしマース」

——先生だっ！

この女優には伝わっていなかったようだ。都筑は、ムカツと顔をしかめた。周りでクスクス笑う声があった。

この女優は、髪の毛を束ね、ひきつめていた。整った顔立ちでスタイルも良く、ジーンズにＴシャツが似合っている。しかし、明るすぎる。現代

ものであれば引き立つ感じであるが、この女優では久美の役は務まらない。

二人目も、同じような感じであった。

都筑は、改めて自分の中にいる久美を目に浮かべた。

久美はスラッとしているが、着物を通して仄かに肉感的な感じを与える。うりざね顔で目は大きい。額は広めで理知的な雰囲気をもっている。唇は小さめで、やや肉厚。ぽってりとした感じだ。身のこなしは、ゆったりと、それでいて毅然としている。そして一番印象的なのは、目だ。強い意志と憂いを帯びた表情を持っている。都筑は、久美のイメージを持つ女優など、いないのではないかと諦め始めていた。そして、映画化を喜んでいた自分に呆れていた。今の世に久美などいない。そう思っているながら、何で栗原の申し出にOKなどと言ってしまったのだろう。都筑は、次第に醒めていく自分に気が付いた。どうせ三人目も同じであろう。

「松村麻耶です。よろしくお願いします」

やはり同じような感じの女優であった。肩まで伸びた髪の毛は、そのままストレートにしている。

表面的には久美のように思えた。だが、やはり明るすぎる。それに演技力があるとは思えなかった。都筑は、松村にも興味を感じなかった。しかし、栗原はこの女優を使うのではないかと思った。後は、栗原に任せればよい。

松村は、栗原から渡された台本を持っていた。オーディションでは、栗原に指示された場面を演技してもらい、合否を決めることになっている。既に松村は台詞を暗記しているはずだ。だが確認のためか台本に目を落としている。

三人目のオーディションともなると、スタジオ内に熱気のようなものが溜まってくる。そのためか、かなり蒸し暑い。松村も暑いのであろうか、

台本を下に置いて、長い髪を両手で掬い上げた。そして、そのまま両手を頭に持っていき、閉じていた目をゆつくりと開いた。

都筑の体に戦慄が走った。

——久美っ！ まさか……。

都筑は、急に立ち上がった。

「誰か、輪ゴムか何か持っていないですか。松村さんの髪をアップにしたいんですが」

スタッフの一人がカチューシャを持っていた。

「松村さん、済みませんが、これを使って顔全体を見せてくれませんか……。そ、そうです。ありがとう。それから誠に申し訳ありませんが、ここに座って三つ指をいってもらえませんか」

スタッフ連中は、急にキビキビと動き出した都筑に驚いた。それに、女優に対し馬鹿丁寧な言葉遣いをすることに、またまた苦笑をもらしていた。

栗原は、静かに都筑を見ていた。

都筑が松村に言った所作は、障子が開き、久美が、ゆつくりと顔を上げる場面だ。栗原が指示していた場面とは違う。

「松村さん、挨拶をするように頭を下げてください。そして、ゆつくりと顔をあげながら……閉じていた目を静かに開いてくれませんか。そのまま目をはっきりと開き、じっと見つめてください」

「見つめる？ 何を、いえ誰を見つめるんですか？」

「誰でもいいです。気持ちとしては思いを抱く人を見つめるような、そんな雰囲気がいいいんですけれど……」

「判りました。やってみます」

松村は、都筑の言った通りに正座した。そして三つ指をつき、ゆつくりと顔をあげた。松村が見つめた相手は都筑だった。松村は、じーっと都筑を見つめた。

——久美だっ！ 久美が居た。

都筑の中にいる久美と、目の前の松村が重なり合った。そして完全に一致した。都筑はその場に凍りついたようにたたずんでいた。

その時、栗原が都筑の肩に手を置いた。

「神谷さん」

都筑は、驚いたように振り返った。

「神谷さん、宜しいですね。久美が決まりましたね」

頷いたものの、都筑は呆然としていた。久美が、久美がこの世にも居た。

栗原は、松村君、君にお願いするよと伝えた。

オーディションは終わった。

松村は帰り際、栗原と都筑の前で、では宜しくお願いいたしますと、にこやかに挨拶をした。都筑は、松村の顔をじっと見た。だが、もはや久美ではなかった。松村は待たせていた友人たちと、じゃー帰ろうよと屈託もない様子で帰っていった。

都筑は、相澤老人のことが気になっていた。あの日以来会っていないのだ。地下鉄に乗ると必ず相澤を捜した。だが相澤を見掛けることはなかった。

栗原は、撮影準備を急ピッチで進めると言った。とにかく早くしなければならぬらしい。都筑は、何故かと聞いた。栗原は、苦笑いしながら言った。

「経費です。長引けばスタジオやセットの費用が嵩んでいきます。スタッフへの手当ても日割りです。それに俳優の人達には、次のスケジュールが入っています。結構、マネージメントも大変なんです」

都筑は、ハイライト場面に立ち会うことになっていた。

「神谷さん、お仕事の邪魔になってはいけません、障子の場面、数衛門が金縛りに合う場面には絶対に来てくださいね」

栗原は、都筑に釘を刺していた。都筑は言われるまでもなく、これらの場面には立ち会いたいと思っていた。栗原の配慮でハイライト場面の撮影は、土曜と日曜日が当てられていた。

薄が原のセットが出来たから見に来ないかと栗原から連絡が入った。映画のセットなど見たことがない都筑は、即、行きますと答えた。

セットは、都筑が思っていたほど手の込んだものではなかった。何となく浮かぬ顔の都筑に栗原は言った。

「撮影後、CGを使って編集するんです」

しかし、この映画のファースト・シーンは薄が原であり、物語全体をイメージ付ける重要な場面である。都筑は、もつと凝ったセットを作るのでは思っていただけに、肩透かしを食ったような気持ちになっていた。

松村と木下も来ていたが、特別、どうとも思っていないようだ。都筑は、セットとは、こう言うものなのかも知れないと納得せざるをえなかった。

都筑が、ぶらぶら歩きながらセットを見ている時だった。叫び声が上がった。スタジオ内から音が消えた。声を上げたのは大道具担当のスタッフだった。

「大丈夫か」

栗原が、そのスタッフの傍に駆け寄った。

「済みません。釘を踏み抜いちゃって」

「どうしたんだ。君らしくもない。二日酔いじゃないだろうね」

「昨夜は呑んだりしていませんよ。でも変ですね。このセットでは、釘なんか使っていないのに」

見ると、スニーカーを通して血のついた釘の先が見える。五寸釘のようだ。スタッフの何人かが大道具の体を支え、一人が足を持ち上げた。彼は

叫び声を上げた。スニーカーが見る見るうちに真っ赤な血に染まっていた。

「かなり酷いな。薄が原のセットは出来上がっている。幾つかの場面を撮るのには問題ない。しかし、次のセッティングまでに傷を治してもらわないと困るな。急いで病院に行った方がいい」

セットの隅の方から、ささやく声が聞こえた。

「変ね。確かに釘は使ってないわ。それに、このセットを作る前にスタジオの床は綺麗に掃除したのにね」

都筑は殺陣の練習にも立ち会った。撮影スタッフも殺陣に合わせてカメラワークの打ち合わせをしている。

右上一刀流の名前は相澤から聞いたのだが、どのような剣法か、つまり刀の動きなどは都筑が勝手に作り出したものである。殺陣師は、まるで昔から存在していた剣法であるかのような雰囲気で殺陣を付けている。都筑は思わず吹き出しそうになった。

見ていると木下の刀の扱いも、カメラワークも素晴らしかった。特にカメラは木下の動きを的確に捉えているようだ。木下は上背がある。すつくと刀を構えた姿は、都筑が見ても惚れ惚れとするものだった。

撮影スタッフは、木下の後姿と横顔しか追っていないようだ。上手いものだ。都筑は感心した。

また、スタジオ内に大声が響き渡った。

「今日は、どういう日だ」

栗原が顔をしかめて声の方に目をやった。木下が頭を抱えてうずくまっている。その傍で殺陣師が、しきりに謝っている。

「どうしたんですか」

「申し訳ありません。手が滑ったのか、木下さんを打ってしまいました」
木下は、まだうずくまっている。

「こんな事は初めてじゃないか。名殺陣師が……」

「自分でも判らないのですが…… 何故か刀が勝手に動いたようなん

す。これからは気を付けます」

「木下さん、痛みますか」

木下が顔を上げた。額の左が赤く膨れ上がっている。

「監督、これじゃ撮影に影響しますね」

栗原が腕組みをしながら言った。

「木下さんの顔が映るのは、ワンカットです。それまでに腫れが退いてくれればいいが、念のため病院に行った方が良いでしょう。まさか頭の骨にヒビなんて。いや、変なことを言うのは止めましょう」

都筑は、映画とは物語の流れ通りに撮影するものと思っていた。筋書き通りに撮影した方が、役者は演じ易いはずだ。だが違うようだった。薄が原を使う場面は幾つかあるが、それらの場面をまとめて撮るらしい。

栗原から電話が入った。

「神谷さん、次の土曜日が障子の場面だったんですが、大道具が、まだ歩けないんです。彼は大道具のリーダーです。ほとんど出来上がっているんですが、壊れそうな民家です。で、彼が最終チェックをしないと…… 本当に壊れたりしたら、大変ですから」

「で、何日ごろになります」

「そうですね…… 一週間後には大丈夫だと思います」

「判りました。ところで木下さんの方はどうですか」

「えー、大分腫れも退きました。牛肉で冷やすと利くらしく、勿体ないなんて言いながら冷やしていますよ」

栗原は、そう言って力なく笑っているようだ。

「栗原さん、撮影って大変なんですね。もう二人も怪我人が出ている」

「いえ、アクションものでは良くありますけど、今回のような映画の場合は滅多にありません」

「そうですか」

都筑は電話を置いたが、何故か嫌な気持ちになった。

都筑は、待ち遠しさと不安とが混じり合った落ち着かない毎日を送って

いた。リハーサルでも良い、松村が演じる久美に早く逢いたかった。

会社の方は、いつも通り真面目に仕事をこなしていた。

地下鉄に乗ると相変わらず相澤を捜したがが無駄であった。今は、妄想もしていない。すすきが原のことばかりを考えていた。そして目を閉じれば、久美が微笑みかけてくれた。

出社すると、いつも通り、夕子が話し掛けてくる。無下にぞんざいな態度は取らないが、夕子を見る都筑の顔には全く笑みがなくなっていた。周りの者は気付いていないようだが、夕子は、今までと違う都筑に不安を感じていた。

障子の場面。セットは抜群の出来栄えであった。今にも崩れ落ちそうな茅葺きの家。都筑自身、近寄るが怖いような造りである。

大道具に言わせると、

「壊れそうな形にシツカリと造ってありますから、決して壊れることはありません」

と訳の判らない説明をした。都筑は彼を見たが、少し足を引きずっている。まだ完治していないようだ。

障子は素晴らしかった。美しい雰囲気だ。まるで光り輝くようであった。照明係りは、何種類かのライトを、いろいろな角度で照らしている。明るさや反射度合いなどのチェックだ。都筑は心躍る思いで眺めていた。

いよいよリハーサルである。

薄暗い雰囲気の中に、ボーっと明かりが燈り、かすかに揺れ始めた。蠟燭の感じが良く出ている。

松村は、黒地の小紋に先筭の鬘を着けていた。

実は久美の衣装については、都筑と栗原の間で言い争いがあった。それ

は衣装合わせの時であった。栗原が用意した結綿の鬘ゆいわたを見た都筑が、これは違うと言いつ出したのだ。

栗原は、障子の場面では久美を未婚の女性として考えていた。つまり、主計に嫁ぐ前の久美である。しかし、結綿の考えは違っていた。結綿は、主計に斬られた時の久美を考えていた。つまり既婚ということになる。

都筑と栗原は顔を見合わせてしまった。久美が既婚か未婚かは、この映画にとって基本的なことであり重要なことである。今まで、二人とも敢えて口にしたことはなかった。言うまでもないことと思っていたのだ。鬘を見て、違いが判ったことになる。周りにはスタッツがいる。二人は外で話し合うことにした。

「神谷さん、久美は数衛門と出会って楽しい夕餉をとります。そして、夜を迎えますね。この場面で久美は恥じらいを見せます。つまり処女性が必要なんです。主計に殺された時は既に処女ではないでしょう」

「確かに処女性が必要です。でも違うんですよ栗原さん。肉体的に処女かどうかなんて関係ないんです。確かに久美は主計と夜を共にしています。でもね、そこには主計に対し、何らの感情も抱いていないんです。つまり蚊に刺されたようなものです」

「……私は、あの場面で久美の初々しさを表現したいのですが……」

「私も同じ考えです。衣装は、地味な既婚女性の衣装だが、表情や仕草には初々しさがある。こちらの方が久美が引き立ちます。それに……」

「良いですよ神谷さん。何でも言うってください」

「素人ですから口幅つたいように気になりますが…… 白い障子の間に地味な衣装。その着物を身にまとう久美には乙女のような輝きがある。この方が良いのではと……」

「松村さんに……そのような演技が出来ると思いますか」

「出来ます」

都筑は、キツパリと言った。

カメラ・リハーサルが続いていた。

松村は障子の前で立ったり座ったりしている。

都筑は、久美が三つ指をつく場面のリハーサルを何故だか見る気がしなかった。本番だけに立ち会いたいと思った。

栗原に伝えると、二時間ほど後に本番を始める予定だと教えてくれた。

都筑は、表に出て喫茶店を捜した。だが中々見つからなかった。いつも寄り道をせずにスタジオに入る。都筑は滅多に都心に出ることなどないため、麻布も詳しくなかった。あちこち歩き、やっと洒落た古風な喫茶店を見つけることができた。都筑は窓際の席に座り、コーヒーを注文した。そして、タバコをくわえながら考えた。

—— どう言う風の吹き回しでこうなったんだろう。一介のサラリーマンが、自分の書いた小説の映画化に立ち会っている。

何が、そうさせているのか理解できなかった。ただ、自分は今、その中にいることは現実のことであり実感できた。栗原、松原、木下、そしてスタッフ達。どのような縁で一緒に映画を作っているのか。いくら考えても理由など判るはずもなかった。

ふと通りを見た。

—— アレッ！

都筑は、通りの向こう側を歩く相澤を見たように思った。そんな馬鹿な。都筑は頭を振った。

時間だ。都筑は、喫茶店を出てスタジオに向かった。スタジオに入ったが、何やら騒々しい。聞けばリハーサル中に、萱葺き屋根の一部が落ちたという。松村は中にいたが、運良く怪我はなかったらしい。

「神谷さん、今回は不具合が続きます。怪我がなかったのが何よりですが、また一週間ほど遅れます。その度に経費が嵩むんですが……」

「経費ですか」

「えー、スポンサーにはスケジュールを出しています。こう予定が狂っちゃうとスポンサーの負担も増えます。今のところ、スポンサーは予定は未定だから気にしないで良いと言ってくれます。でも、こう度重なるうちよつとね。それに俳優たちの次のスケジュールも気になります」

「大変ですね。これ以上、長引くとどうなるんですか」

「……」

「栗原さん」

「改めてスケジュールを組むか、下手するとスポンサーが手を退きます」

「そうすると」

「映画は、中止です」

「中止……」

「映画は、興行での収益を見込んで経費予算を組みます。今回の契約では、中止になった場合、これまでの費用は総て私が背負うことになりました」

「背負うとはどういうことですか」

「私の借金になります」

「借金っ。何でそんな無茶な契約を結んだんですか」

「制作中止になるなんて考えられない映画です。スポンサーとの契約を急ぎたかったし、配給会社のプロモーションを早くから実施して欲しかったんです。今までの映画は、すんなり行ったのに……」

「万が一、そうなった場合、返す当てはあるのですか」

「ある訳ないでしょう。今まで三本の映画を作りました。まあまあの評価だったんですが、手元に残った金は大したことありませんでした」

「派手なようで結構、大変なんですね」

「えー、独立プロですから金策から何から何まで自分でやらなければなりません。映画会社に勤めれば良いのですが、そうすると自分なりの映画が作れない」

「難しいですね。栗原さん、本当に返す当てはないんですか。どうするんですか」

「数衛門を真似て何処かに身を隠さなければなりません。それとも……」

その時、都筑は強い視線を感じた。目をやると何とスタジオの隅に相澤が立っていた。都筑は、大声で呼んだ。

「相澤さん、何で此処にいるんですか。私、地下鉄の中で捜したんですよ。そこに居てくださいね」

都筑は相澤の方に走り出した。しかし、相澤は寂しそうな表情を残したまま、ふつと見えなくなってしまった。

「相澤さん……。変だな、何処に行っちゃったのかな」

栗原の隣に戻った。

「神谷さん、相澤さんて」

「今、スタジオの隅に老人が立っていたでしょう。見ませんでしたか」

「いえ、誰も居ませんでした」

「えっ、そうですか。変だな」

都筑は、相澤のことを話そうかと思ったが止めた。何百年も生きているなどと言えば変人扱いされてしまう。

栗原は、都筑が誰かと勘違いしたのだと思った。

四日ほどで萱葺き屋根の修理が終った。

その日は火曜日だったが、都筑は本番を見たかった。会社には有休届けを出した。

いよいよ、本番が始まるうとしていた。スタジオ内には緊張が走っていた。

都筑は、栗原とカメラマンの脇にある椅子に座わり、壊れかけた建物を見ていた。

スタジオ内が薄暗くなった。

スタート！ 栗原の声が響いた。カメラが廻り始める。台本通りに障子に灯りが燈る。周りの薄暗さの中にほんのりとした灯り。障子紙の素晴らしさである。中心は赤く周りは淡い明るさ。人影が映った。松村の身のこなし方は、静かでゆっくりとしている。影が障子に近づくと大きくなり、

そして影は下へと小さくなっていく。松村が座ったのだ。

静かに障子が開いていく。三つ指をついた松村が光の中に座っていた。そして、ゆっくりと顔を上げ、閉じていた目を静かに開いていく。

都筑は、魅入っていた。久美が居る。久美が見つめている。

カメラは静止したままだった。その時、突然、都筑が立ち上がった。

「カメラっ！ 何をしてるんだっ！ アップ！ ズームしながら久美の顔をアップ！ 久美の顔を画面一杯に映すんだっ！ そう！ そうだ！ アップだっ！」

叫びにも近い声であった。

久美は、大きく見開いた目で一点を見つめていた。何かに確信を抱いているような落ち着いた姿勢。唇には静かな微笑み。内から湧き出るような喜びや情念は、潤みだした目に溢れていた。

どれほどの時間が経ったのであろうか。カメラは廻っている。久美が見つめているのは都筑であった。都筑も久美を見つめていた。瞬きもせず

に。

小さな声で栗原がカットと言った。

スタジオ内は、凍ったように動きが止まっていた。松村もそのままの姿勢であった。都筑は椅子に座ろうとしたが、椅子を倒してしまった。ガタツ！ この音で全員が動きだした。

「あっ！」

都筑が声をあげた。

「栗原さん！ 済みません。私は…… 私は、何てことを。余計な事をしています。済みません」

栗原は何も言わず、じっとしていた。周りのスタッフ達も事もなげに自分の持ち場で後片付けをし始めている。都筑一人が、椅子に座り込み俯いていた。

この日、栗原は都筑を酒に誘った。スタジオの近くにある居酒屋である。酒をつがれながら都筑は言った。

「今日は本当に済みませんでした。自分でも何故あんなことを口走ったのか判らないんです。もう撮影には立ち会わない方が……」

「神谷さん、謝らなくてはならないのは私の方です。いやお恥ずかしい。脚本を書いていた時には、あの場面は神谷さんが言ったようにアップを考えていました」

そう言いながら栗原は、ビールを一気に呑んだ。

「しかし、障子と障子の間で顔を上げる久美の姿は、そのままでも綺麗なものです。障子の白さと久美の姿。この前、神谷さんと衣装について話をしましたが、神谷さんの言うとおりでしたよ。久美の表情をアップにしても画面としては充分に雰囲気を出せます。しかし、アップした方が、さらに久美の美しさを表現できることは判っていたんです」

栗原は、ふーっと小さくため息をつき続けた。

「昨日、最終的にカメラワークを考えたのですが、何としたことかスポンサーの顔が浮かんできたんです。障子を徹底的に美しく……。アップを止めることにしました。障子そのまま画面に残しておきたかったんです」

「何故ですか」

「予定を大幅に遅らせていますし……。スポンサーに気を使いすぎたんですね。金がなければ映画を作れません。ありがとうございました。私の替わりに神谷さんが思い通りの映像を作ってくれた」

注意されると思っていた都筑は、思ってもいない言葉を聞き、戸惑うばかりであった。

都筑は、ますます落ち着かない日々を送っていた。目を閉じてても、目を開けていても見えるのは、何か言いたげな表情で、じーっと見つめる久美。都筑は、久美が何かを求めているように思うのだが判らなかった。

通勤の地下鉄に乗っても既に相澤を捜していなかった。いや、相澤のこととは忘れかけていた。考えるのは久美だけであった。妄想に耽ることもない。久美以外の人物は、現れなくなっていた。会社に行っても仕事が手に

つかない状態になっていた。

「都筑さん、おはようございます」

「……」

夕子が声を掛けてきた。

夕子は、今までのように打ち解けた話し方をしなくなっていた。この前、冷たい目で見つめられた時に不安を感じたからだ。都筑さんは淑やかな女性が好きなんだ。このままでは嫌われてしまう。夕子は、男に対し初めて焦りを感じていた。

「都筑さん、どうしたんですか。何だか体調が悪いようですよ」

「い、いや、何でもない。ちよつと疲れているだけなんだ」

「そうですか。最近、変ですよ。皆も心配しています」

「……」

「余計なことを言う人がいるんです。恋人に振られたんじゃないかなんて……。私は、疲れてるのよって言ったんです。そしたら振ったのは私じゃないかなんて、変なこと言う人もいて」

夕子は、冗談めいたことを言えば少しは笑ってくれるのではと思っていた。だが、都筑は表情すら変えてくれなかった。

「私、本当に心配なんです。無理をしないでください。有休も残っているんですから」

「本当に何でもない。気遣ってくれてありがとう」

夕子は都筑と向き合って話をしたが、都筑の目は焦点が定まっていないように思えた。私は嫌われだしているのでは。夕子は、ますます不安な気持ちに駆られていた。

その時、部長の江藤が声を掛けた。

「都筑君、出社早々で悪いが、例の企画、先方さんと打ち合わせをしたはずだが、経過を報告してくれないか」

神谷は、デスクにある書類を持ち江藤の前に行った。

「報告書か。見せてくれないか。サンキュー。……おい、これは、とつく

に契約が成立した案件だよ」

「済みません。間違えました」

「どうしたんだ、ボケーっとして。君らしくないじゃないか。打ち合わせは三日前だったはずだ。まとめていないのか」

「は、はい。済みません」

「済みませんばかりじゃ、どうしようもないだろう。君、どこか悪いのか」

江藤は、都筑をじーっと見たが、驚いてしまった。そこには別人のような都筑が立っていた。

「都筑君。先方さんとの打ち合わせには山田君も同席していたはずだ。この件は、彼に引き継いでくれないか。君は、疲れているようだ。今日は、帰って良い」

「済みません」

江藤は、今日、早く帰ったからといって都筑の体調が戻るとは思えなかった。

「都筑君、有休も残っているはずだ。何日か休養を取りたまえ。体調を整えてから出社するように、いいね」

夕子は、人事部に戻らずに江藤と都筑の遣り取りを聞いていた。

都筑は、済みませんを連発し、部屋を出ようとした。夕子が都筑に走り寄った。

「都筑さん、私、心配です。どうしたんですか」

都筑は、夕子を全く無視して部屋を出て行った。夕子は、その場に呆然とたたずんでいた。周りの社員たちが夕子を見た。夕子は、涙を流していた。

都筑と夕子には、何かあった。

社内にこの噂が広がっていった。

江藤と話している時にも、都筑の頭の中には久美がいた。

不思議だ。松村と話をしていても何も感じない。しかし、松村が演技を始めると、そこには久美が居る。その久美が、日を追うごとに現実の人間

と思えてくる。私はどこかおかしいのか。久美は、何かを求めている。

寝不足の日々が続いたが、都筑は毎日のようにスタジオに行った。あの日以来、会社には行っていない。栗原や松村だけでなくスタッフも訝しがつていた。

「神谷さん、会社の方は良いんですか」

「栗原さん、自分の書いたものが映画になるなんて、一生のうちでこれが最後かも知れません。会社には有休を出しています。減多に取りませんでしたので、たっぷり余っています。有休を取った方が会社も喜ぶんですよ。会社は、退職する時に有休を買い取らなければなりませんからね。つまり、金が出ることになります」

栗原は会社務めなどしたことがない。そう言うものかと思った。

「最近、寝不足なんじゃないですか。何だか顔色が良くないですよ」

「いやーその通り。私もこの映画の完成に期待していますから、いろいろと考えちゃうんです。寝不足になります」

萱葺き屋根が崩れた日、都筑がスタジオで相澤を見掛けた日だが、あの日を境に事故のようなものは起こっていないかった。

久美が、主計に詰問される場面、斬られる場面など、松村の演技は、都筑が思い描いていた通りの毅然としたものであった。

都筑は改めて久美のことを考えた。久美は強い女だ。内に秘めた信念を誰も変えることはできない。久美は、本当に主計に対して何らの感情も抱かなかったんだ。

都筑は、ますます久美にのめり込んでいった。

栗原も松村の演技には驚いていた。

撮影終了後、栗原は、近くの喫茶店でコーヒーを飲みながら松村と話した。

「松村さん、君、今、恋をしている」

「監督、どうしたんですか。そんなこと聞いて。監督らしくありませんよ。栗原さんは、プライベートなことには口を出さない監督って有名なのに」

「ん、まーそう言わずに。別にマスコミに流したりしないから」

「そんな言い方は止めてください。仮に監督が女優の恋人を知ったとしても、マスコミに流したりする人だとは思っていません」

「ちよっと言い方が拙かったね。謝るよ。実は、松村さんを見てると何となく、そんな風に感じるんだ」

「どうしてでしょうね。監督だから正直に言いますけど、残念ながら私には恋人なんかいません。それに……これは内緒ですよ。私、まだ恋をしたことないんです。ちよっと寂しいんだけど。でも、何故、急にそんなことを……」

「いや、君の演技を見ていて、ふと、そんな感じがね」

「どう言うことですか」

「うん、真に迫るというか、久美になり切っているからね。久美は数衛門が好きだ。内に秘めていた恋。あからさまには表に出さない恋。この演技は難しい。でも久美は、そういう女だ。僕は、いろいろと演出を考えた。でも、僕が考えていた久美よりも松村さんの演技の方が久美らしい」

「監督、私、褒められているんですか」

「そう。僕は松村さんの演技に驚いている。よく野球の選手なんかが、突然、ヒットを打ち出したりすると化けるって言うよね。最近の松村さんを見てみると、そんな感じだよ。神谷さんも同じ意見だと思うな。以前、君だったら久美を遣れるって自信を持って言ってたよ」

「そうですか。でも、そう言っていただと何だか嬉しくなります。監督、神谷先生……いけない。先生って言っちゃいけないでしたね。私、神谷さんのことを余り聞いていないんですけど。ご自分の作品を映画化するのって、今回が初めてですよね」

「神谷さんにとっては総てが初めてだと思うよ。あの人は普通のサラリーマンだから」

「あの方、変わってますね」

「えっ、どんなところが」

「だって、急にカチューシャをしてくれとか、監督の替わりにカメラアツプとか……。それに……」

松村は、口を閉じた。

「何なの」

「いえ、いいです」

「松村さん、作品に関する事だったら聞いておきたい。それでも私は監督だ。すきが原を代表作にしたいと思っっているからね」

松村はコーヒークップを見ながら、話すかどうか考えているようであった。

「私…… 久美を演技している時だけなんですけど、何だか、昔、神谷さんにお会いしたことがあるような気がするんです。絶対にお会いしていないはずなのに」

「へー、それはまた面白いね。でも、そう感じるのは演技している時だけなんだ」

「ええ。メイクを落としてお話する時なんかは、全然感じないんです。

監督、私が最初にそう感じたのは、オーディションの時なんです。三つ指をつけて、誰かを思っって目を上げてくれっって言われましたよね。あの時、たまたま神谷さんが前に立っっっていらっしやっつたので、私、神谷さんを見つめたんです。そしたら……。変ですね。以前、お会いしたことがあるように感じちゃっって……」

「多分、神谷さんの理想の女性が久美なんだと思うな。神谷さんは思い入れが強い人なんだよ、きつと。松村さんに、その思い入れが移ったんじゃないかな。実はね、モデルになった人が居るのかっって聞いたことがあるんだ。そしたら、そんなの居ないっってね。じゃー、理想の女性なんですっって言ったら凄い顔をしましたよ」

「監督、人間て凶星の時には、ムキになって否定するっって言いますよね。神谷さん、きつとそれなんですっね」

「多分ね。でも自分では気付いていない」

「気付いていない……。人間て不思議なものですっね」

「そうとも言えるね。だから複雑で面白い」

「あら、だから辛いつてこともあるんじゃないですか」

「これは参ったな。君に一本取られた感じだ。松村さんの言うとおりだね。ところで、神谷さんのことだけど、彼が居ると演技し難いとか、そういうことはないよね」

「えー、全然。むしろ逆です。奇妙な気持ちにはなるけど、安心して演技できるんです」

「へー、これまた不思議だね。さて、撮影もうすぐ終る。よろしく頼むよ」

「はい」

数衛門が金縛りに合う場面の撮影が始まる。栗原は、この場面をワンカットで撮影すると言っていた。木下の額は、すっかり治っていた。

都筑は、撮影には何度も立ち会っていたため、おおよそ撮影がどのようなものかを理解していた。

「栗原さん、この場面、ワンカットで撮影するのは無理なんじゃないですか」

「神谷さん、この場面はワンカットなんです。数衛門が外に出ようとする場面から、久美と夫婦になるまで、ワンカットなんです」

栗原は、それだけしか言わなかった。

後日、栗原が話してくれたが、ワンカットで撮ることにより、時間の流れや大きく変わる心象などを印象深く映像化できるらしい。そう言われてみれば、久美が三つ指を着く場面もワンカットであった。

都筑は、この場面のリハーサルに立ち会った。

半分開いた障子に木下が手を掛けている。向こう側には薄が見える。木下は、この場面で初めて顔を映される。そのためか、普段とは違い、かなり緊張しているようだった。いくつかのダメが入ったが、都筑が見ても良く演じているように思えた。

本番である。木下の演技が中心だ。松村も控えている。

障子を開けて外を見る木下の後姿。無理に体を動かそうとする木下。金縛りに合い体を動かせない。フツと力を抜く。肩が幾分下がる。自分の死を悟った瞬間。

急に振り向く。死を悟った戸惑いと、久美と同じ世界に入った喜びが混じりあった表情。顔のアップ。良い。目には微かに涙。

大声で久美を呼ぶ。カメラは、ズームアウトし、久美が現われる場所を映す。襖を開けて久美が部屋に入ってくる。久美の顔をゆつくりとアップする。カメラは、幾分ズームアウトし、久美と呼ばれた驚きと、数衛門と夫婦になった喜びが満ち溢れた久美の姿をとらえる。さらにズームアウトし、二人の姿を横から映す。見つめ合う二人をカメラは映す。総てが動きを止めている。時間にして四十数秒。

都筑は、幸せであつた。こらえていた二人の思いが、ここで一つになったのである。このまま総てが終わつても良い。この感動の中に浸つていたと思つた。都筑は、蒼白な顔でながめていた。

見つめ合つた二人が場面中央で抱き合う。カット。

都筑の目に、この場面が焼き付けられた。

栗原によると最後の場面、つまり横田の部屋の情景は、CGを多用してリアル感を出すようだった。撮影現場に誘われたが、都筑は、この場面など、もうどうでも良かった。

撮影は終つた。栗原は、ほとんど寝ずに編集に没頭していた。

都筑は、自分の部屋でボーっとしていた。会社や仕事などは、とくに頭から消えていた。昼も夜もなかった。リビングのソファに座り、目の前でじーっと都筑を見つめる久美だけを見ていた。都筑は、実在しない久美に取りつかれていた。

空腹感が襲うと仕方なしにコーヒーマイルクを作つて飲んだ。それでも空

腹が満たされない時にはカップラーメンを食べた。牛乳やラーメンがなくなるとフラフラとスーパーに買いに行く。新聞受けには何日分もの新聞が差し込まれている。郵便受けも同じ状態であったが、都筑の目には入らなかった。都筑が遣ることといえば、唯一、ベランダの植木鉢に水を遣ることだけであった。

映画が完成したと栗原から連絡が入った。試写会は明日。来て欲しいと栗原は言った。電話を受けた時、都筑はボーッとしていた。とにかく何もかもが面倒であった。都筑は行かないと言った。

映画…… 都筑は撮影に立ち会ったことを思い出した。頭の中に、薄が原の場面が次々と映し出されていった。だが、それらには動きがなかった。久美が登場する何枚もの写真が、一枚一枚、順繰りに目の前に現れた。

何故、久美は動いてくれないのか。都筑は無性に久美に逢いたくなかった。

会社では江藤が困り果てていた。体調を整えてから出社しろといったのは事実であったが、二、三日、休暇をとれば出社してくるだろうと思っていたのだ。ところが既に一カ月以上が経っている。しかも都筑からは何の連絡も入っていない。就業規定に抵触するだけでなく、仕事の遣り繰りにも支障をきたしていた。例の仕事は山田に振ったが、まだ急ぎの仕事が幾つもあるのだ。出て来てくれないければ困る。

江藤は、部下たちに大きな声で聞いた。

「都筑君から何の連絡も入っていないのか」

顔を上げる部下はいなかった。

「おいっ、都筑がどうなっているのか、知ってる者はいないのか」

部下の一人が、部長と声を掛けた。周りを気にしているのか、その社員は席を立ち、江藤の傍に行き小声で話した。

「部長、ひよっとすると小島さんが知っているかもしれませんよ」

「えっ、人事部の小島か。そう言えば仕事前に、いつも都筑と話していたな」

江藤は、神谷と夕子の噂を知らなかった。

「それだけじゃありませんよ。部長が都筑さんに休みを取れって言った日を覚えていますか」

「当たり前だ」

「都筑さんが部屋を出て行きましたよね。あの時、小島さんは、都筑さんと言って泣いたんですよ。変だと思いませんか。二人は付き合っていますよ。小島さんなら何か知ってますよ」

江藤は思い出した。そうか、あの時泣いたのか。

「ちょうど良い。人事からも都筑の件で話があると連絡が入っている」

人事部にある会議室で取締役人事部長の小笠原と江藤が話をしていた。

「江藤君、困るよ。都筑君だけど、出社していないというじゃないか」

「申し訳ありません。体調が悪いようでしたので、二、三日休めと言ったのですが」

「それが一ヶ月以上かつ。都筑はどうなっているんだ」

「それが皆目……」

「判らないというのか。病気で長期休暇は認められている。この場合は診断書が必要だ。どうせ受け取っていないんだろう。いいかい、このままだと規則上、懲戒免職にせざるを得ない。彼の経歴に瑕がつくぞ」

「はー」

「皆目判らないと言うことは、電話も入れてないのか。君にも困ったものだ。一応、君の人事管理についても調べてみたが、別に問題はないようだったが……」

「と、取締役、私のことも調べたのですか」

「当たり前だ。都筑の今までの就業態度は悪くないし、きちんと仕事をする社員と聞いていた。君もそのように評価をしていたじゃないか。ところろが急にこれだ。人事としては、あらゆることについて調べなければならな

いだろう。上司についても調べるのは当然だよ。このままでは周りに与える影響も良くない。君は、都筑をどうするつもりなんだ」

「申し訳ありません。急ぎ……。ところで取締役、小島さんですが……」

「小島がどうした」

「都筑のことを知っているのではないかと」

「小島がつ。何を言いたいんだ。二人は付き合っているとでも言うのか。」

江藤君、それは確かか」

「いえ、そのような噂が……」

「君は、はっきりしない男だな。小島は体調を崩して休んでいるよ。診断書も出ている」

「休んでいる。そうですか。二人が同時に休んでいる」

「江藤君、どうも君は下衆っぽくものを考えるようだ。小島のところには同僚が行って調べてある。本当に病気だ。都筑の件だが、一両日中にはつきりしてくれたまえ。懲戒免職か長期病氣有休か。病氣の場合は診断書を出すように。いいね」

「はい。判りました」

「それから、君の仕事振りは悪くないが、人事管理については、このままではいけない。しっかりしなければ駄目だよ」

「も、申し訳ありませんでした」

江藤は、会議室を出た途端、都筑を諦めようと思った。このままズル引きずっていると自分の立場が悪くなってしまう。

「部長、どうでした」

先ほど耳打ちした部下が聞いた。

「うるさいっ！ いいな、もう都筑のことは口にするな。余計なことを考えずに仕事をしろ！」

江藤の豹変振りに、部下たちは戸惑いを感じた。

江藤は、やたらと細かいことを言うようになっていた。遅刻でもしようものなら大変であった。皆の前で大声で叱るのだ。私語が耳に入ると、仕事をしろと怒鳴る。デスクの上には、常に業務規定、服務規定、就業規則

の書類が置かれていた。

このオフィスから笑い声が消えていった。

あの日以来、都筑は会社に来ていない。どうしたのだろう。夕子は仕事も手につかないし、何もする気が起きないでいた。都筑のことが心配でならない。それに会社では、都筑との噂が広まっていた。今まで友人だと思っていた社員の何人かが、何かあったのと訊いてきた。

「だって貴女も気が付いたでしょ、都筑さんの変わりように。私は、心配なだけよ」

「あら、そうかしら。あの時の小島さんて切羽詰った感じだったわよ。涙なんか流して。ねえ、都筑さんに何かされたんじゃないの」

社内の多くの者が夕子に変な目を向けた。中には嘲笑うような顔で見る者もいた。人事部でも同じであった。書類を書いていると、ふと視線を感じる。顔を上げると、さっと顔を下げたり、目線を逸らせたりする。

夕子は、居たたまれない思いに駆られていた。休みを取りたい。

その日の帰宅途中、夕子は、眼科医院で診断書を書いてもらった。重度眼精疲労のため一週間ほどの自宅加養を要する。

休みを取って三日目であった。同僚の小林が見舞いに来た。その時には、サングラスを掛け、それっぽく演技をした。小林は、裏表のない気の良い同僚だった。その小林が、お大事にねといいながら訊いた。

「ねえ、都筑さんと何があったの」

夕子は、自分が一方的に都筑に恋していることに気付いていた。考えてみれば都筑の方から声を掛けてきたことはなかった。声を掛けたのは、いつも自分であった。都筑は、優しく話をしてくれたが、それは好きだからとか、そのようなものではない。夕子は、判っていた。しかし、だからと言って都筑を忘れるとは思わなかった。初めて何かを感じさせてくれたのが都筑なのだ。今までは都筑とは何もなかった。でも明日は判らない。

「小林さん、今日はお見舞い、ありがとう。都筑さんのことは、もう何も聞かないで。だって関係ないんだから」

小林は帰った。夕子は、明後日にでも出社しようと思った。都筑とは何もなかったと小林は会社で話してくれるはずだ。だが、小林は夕子の言ったことを別の意味に解釈してしまった。

夕子は出社した。だが自分を見る周りの目は、さらに酷いものになっていた。誰も口を聞いてくれない。夕子は、一人になりたくてトイレに行った。すると、先輩の鈴木が、夕子を追い駆けるようにしてトイレに入ってきた。

「小島さん、あんた小林さんに酷いこと言ったらしいわね。あんたには関係ないんだから、何も聞くななんて。私も、貴女がそんな人だったとは知らなかったわ。皆が言ってるわよ。都築さんに振られるのは当然だって。ひよつとして、都築さんが体を壊したのもあなたのせいじゃないのって。貴女、よく今まで人事部で遣ってこれたわね」

夕子は、愕然とした。もう、この会社には居られない。

夕子は、自宅で悶々としていた。会社に行く気は起きなかった。

このような状況でありながら、寝ても覚めても頭の中は都筑のことだけであった。都筑の顔が浮かぶと、体が火照ってくる。自分で火照りを鎮める以外になかった。空しい行為の繰り返し。

都筑の自宅の電話と住所は知っている。何度、携帯電話を握ったか判らない。だが、都筑は淑やかな女性を好む。夕子は、何も出来なかった。私は、どうすれば良いのだろう。思い切って幹子に電話をした。

「夕子、あんた三十過ぎてるんでしょう。まだ、そんな子供みたいなこと言ってるようじゃ駄目ね。何でそんな風にグズグズやってるのか信じられないわ。でも面白いわね。男が声を掛ける女は、男に声を掛けられない。笑っちゃうわ」

幹子は、夕子のウジウジした話にうんざりし始めていた。

「ねー、そんな冷たいこと言わないで助けてよ」

恥ずかしかったが体が火照ってどうしようもないと話した。急に幹子の口ぶりが変わった。

「夕子、それって判る。辛いわよね。うちのもねえ、最近飽きてきたらしいの。馬鹿にしてるわ」

「飽きたって？」

「してくれなくなったの」

「そんな……。でも、そういう時はどうするの」

「簡単よ。世の中には、それだけの男がウジャウジャいるわ。それっぽく流し目をすればひよいひよい付いてくる。夕子だったら狙った男が尻尾振って寄ってくるわよ」

「……」

「夕子ね、今は、そんな時代よ。楽しまなくっちゃ損よ。ちよつと待って、夕子の話ってこういうことじゃなかったわよね。その都筑って男のこ
とよね」

「ミキ、どうしよう」

「最後の手段ね。住所、判ってんなら行っちゃえばいいのよ。押しかけちゃうの。果物でも持っていけば絶対に入れてくれるわよ。部屋に入っちゃえば勝ったも同然よ。看病とか何とか言って体でも擦ってあげるの。そしてね、手が滑った振りして思いつき胸を押し付けちゃうのよ。夕子の胸は凄いんだから。男ならすぐ手を出すわ」

「でも、そんな事したら、はしたないと思われるわ。それに、都筑さんて、そんな人じゃ……」

「馬鹿ね。夕子って本当に馬鹿。そんなこと言ってるから、いかず後家なんて言われるんじゃない」

電話の先で、ウツと呻く声がした。

「ミキって酷い！」

幹子は言い過ぎたと思った。だが、一度、口にしてしまえば遠慮はなくなる。

「私だけが言ってるんじゃないわ。だって、仲間の中で結婚してないのって夕子だけじゃない。折角、凄い女の武器を持っていながら……。皆、じ

れたいのよ。夕子だって結婚すれば私たちと同じ会話ができるじゃない。みんな夕子のそういう話、聞きたがっているのよ。私たちが会うと凄いわよ。もう、明け透けな話ばかり。あの短大、お嬢様学校なんて言われているじゃない。笑っちゃうわ」

夕子は混乱してきた。そういうものかも知れないと考え出していた。幹子が追い討ちを掛けた。

「遣っちゃえば、こっちのものよ。夕子、あんた、私に相談してるんでしょ。今までも私、親切に答えてるじゃない。たまには私の言う通りにしてみたら」

「……」

「はつきり言うけどね、言う通りにしないんだったら、もう相談なんかしてこないで。電話があつても、私、切るからね」

夕子は意を決した。

すすきが原は、栗原の最新作であることや、原作者が全くの素人であること、今までの松村とは違った役柄であること、木下の顔が一場面しか映らないことなど、映画ファンに限らず、報道機関の興味をひいていた。前評判は凄いいものだった。

栗原や松村、木下には、雑誌社から幾つもの取材申し込みが入った。

栗原は、映画を見てくださいと言い、余り多くを語らなかった。

松村と木下は、今まで経験した撮影とは違い、演技をいって何故か役柄に引き込まれるような感じがしたと話した。

松村は、そう語った時に、遠くを見るような表情になった。

ある映画雑誌が、その写真を大きく掲載した。写真を見た者は、松村の目が生きているような感じを受けた。ある女性は、今にもまばたきするような感じを、ある女性は涙がこぼれ出すのではないかと思った。中には理由なく嫉妬を感じる者もいた。男性の多くは、目を逸らすことが出来ず、ただ魅入った。

都筑を取材したいと、何件かの依頼が栗原に入った。栗原は、多分駄目

でしようと言った。念のため、都筑に電話を入れてみたが思った通り、都筑は全く興味を示さなかった。都筑にとり、そんなことはどうでも良いことであった。

初上映のスケジュールが決まった。早速、栗原は都筑に連絡を入れた。

「神谷さん、初上映の日取りが決まりましたよ。当日は、一緒に見てください。今度は断ったりしないでくださいね」

都筑は、もう一度、久美に逢いたいと思っていた。上映日は、三日後だった。

初上映の日が来た。

さすが栗原は、一日に四回上映される予定だが前売り券は既に完売であった。上映する劇場は、かなり広く、当然ながら全席指定である。当日券を求める長蛇の列が上映館を取り巻いていた。並んでいる者の多くが、例の映画雑誌を持っていた。

この日の整理券が配られたが、貰えない客が大勢出てしまった。彼らは、また明日、出直して来いと言うのか。立ち見は駄目なのかと係員に迫った。上映館は、要求を請けざるを得なかった。会場内の後方と横の通路に客が立ったが、観客たちは落ち着いた様子で映画が始まるのを待っていた。

栗原は、支配人の応接間にいたが事務員から連絡が入った。通用口でいざこざが起きていると言う。

「栗原さん、変な人が来ています。栗原さんに呼ばれたとか言ってます。何だか気持ち悪い人です」

栗原は都筑が来たと思った。

「名前を聞いてください。神谷という人だったら、会場に用意した神谷さんの席までお願いします」

初上映の場合、上映の前に監督や出演者が挨拶するのが恒例だが、栗

原の配慮で挨拶は終了後に行うことにした。松村や木下が顔を見せれば、会場内に歓声などが起る。栗原は、静かな雰囲気の中で上映したかった。

栗原は会場内の自分の席に座った。隣の席には都筑がいた。久しぶりに都筑と顔を合わせたのが、栗原は驚いてしまった。都筑は痩せ細り、目付きも定まっていなかった。

「神谷さん、どこか具合でも……」

「いえ、別に…… ちよっと、寝不足だけです」

二人の会話は、これだけだった。

その頃、綺麗なリボンを結んだ果物カゴを手にした女が、地図を片手に歩いていった。夕子だった。夕子は、ブラウスにタイトスカートの清楚な服装だった。だが、ブラウスは薄手の生地であり、胸の膨らみが透けて見えるものだった。夕子にとっては、思い切った服装だった。

都筑の住所は知っていたが、訪れたことはない。マンションは簡単に見つかった。入り口に郵便受けがあった。夕子は都筑の郵便受けを見たが、郵便物が差込口から溢れていた。チラシ類が多い。どうしよう。持つて行こうか。夕子は取り出せるだけの郵便物を手に持って階段を上がった。都筑の部屋の前に来た。玄関の横には新聞受けがあったが、同じように新聞が溢れていた。新聞屋が置いたのであろうか、何日分の新聞が玄関の扉の横に積んであった。

—— 都築さんは、何日なんにちも家に帰っていないのだろうか。それとも病気で部屋を出られないのだろうか。そう言えば都築さんに最後に会った時、ボーンとしていた。

夕子は心配になってきた。

高鳴る胸の鼓動を抑えながらインターホンを押した。

だが、何度押しても都筑の声は聞こえてこなかった。夕子はドアのノブ

を回してみた。鍵は掛かっていない。勇気を出してノブを掴みドアを開けた。部屋からは、ムーンとした臭いと生暖かい空気が流れてきた。夕子は、胸騒ぎがした。

——入っても良いのだろうか。

夕子は、気になったが都筑に逢いたい気持ちの方が強かった。恐る恐る部屋に入ってしまった。十二畳ほどのリビング。都筑は居ない。リビングは散らかっていた。

——都筑さんは綺麗好きはずなのに……。

廊下に出て寝室を捜した。廊下に面した部屋のドアが半分開いていた。

夕子は、そっとドアを押した。敷きっぱなしの布団。だが、都筑は此処にも居なかった。

——都筑さん……

夕子は、誰も居ない布団を見ていた。

——都筑さんは何処に行ったんだろう。

夕子は、どうすれば良いか判らなかった。ただ布団を見ていた。

すると、布団の上にボーツと何かが見えてきた。夕子は、恐ろしかったが目を逸らすことができないでいた。夕子が見ている前で霧のようなものが、次第に形をなしていった。

布団の上に、日本髪を結った着物姿の女が見えてきた。姿がハッキリと見えた。女は、頭を下げて座っていた。

夕子は、目を見張った。膝がガクガクしてきた。喉は干からび、叫び声を上げることも出来ない。夕子は、ただ女を凝視していた。女がゆっくりと顔を上げた。そして口を開いた。

「お引き取りくださいまし」

そう言うとき、女はニコツと笑いながら、ふーっと消えた。夕子は、震えながらその場にへたり込んでしまった。

映画が始まった。

ファースト・シーンである薄が原の場面では、観客の話し声が聞えていたが、次第に会場内は静まり返っていった。

水を打ったような会場。観客は、食い入るように、栗原が作り出した美しい映像を追っている。

栗原は、幾度となく都筑に目を移した。都筑は、静かな表情で画面を見ているだけだった。

—— 神谷さんも落ち着いて見ている。

一時は、都筑の激しく変化する感情の動きに戸惑い、心配した栗原だったが、今は安心して観客の雰囲気や大画面に展開される場面を見ることができた。

都筑は身じろぎもせずに画面を見ている。

久美が三つ指を着く場面になった。栗原は、都筑がちよつと体を動かしたように思えた。

—— 神谷さんは、この場面が好きなんだ。

栗原は、ふとオーデিশョンの日を思い出した。

いよいよ数衛門が金縛りに合う場面だ。観客も木下が初めて画面に顔を見せることを知っている。会場のそこ此処に落ち着きのない動きが始めた。お目当ての木下である。大画面で見る木下の後姿は素晴らしいものだった。

栗原も数衛門が振り返る場面を、改めて見つめる事にした。

数衛門が振り向いた。

あつ！ 会場内に、どよめきが起こった。木下ではない！

画面に現われたのは、喜びに満ち溢れ、異様に光る目に薄っすらと涙を溜めた顔が写しだされた。

それは都筑の顔だった。

栗原は、咄然として画面を見つめた。

—— どう言うことだ？ これは、これは、どう言うことなんだっ！

画面では、久美と都筑が、じーつと見つめ合っていた。そして、二人は抱き合った。

その時、栗原は奇妙なものを見た。

画面の隅に、寂しげな表情の痩せた老人を見たのだ。老人は、抱き合う二人を悲しみに満ちた目で見ている。その目から大粒の涙が落ちた。そしてふーつと消えた。

場面は、建設現場に変わっていたが、見ている者は誰一人としていなかった。観客の話し声やざわめきが大きくなっていった。

栗原は、隣の都筑を見た。都筑は、満足げな幸せそうな表情で目を閉じていた。

「神谷さん！ 神谷さん！」

都筑は、目を開けない。

「神谷さん！」

栗原は都筑の体を揺さぶった。

その時、都筑の体が、ゆっくりと座席の背もたれに、仰け反るように倒れていった。

都筑は、息をしていなかった。

会場内に悲鳴が広がっていった。

(了)

譚
綴

「
すすきが原
」

二〇〇五年二月七日（改）

編集・発行者 エムツー・プラデオ
三 谷 弘

禁無断転載・複写

M²pladeo
Planning & Design Office
Copyright© H.Mitani